

《翻 訳》

キリシタンと統一権力

A Igreja Cristã (Kirishitan) no Japão e os Poderes Unificadores Japoneses nos Séculos XVI e XVII

高瀬 弘一郎

TAKASE KŌICHIRO

日埜 博司訳

Tradução portuguesa por HINO HIROSHI

訳者はしがき

現在刊行を準備しているドミニコ会宣教師ディエゴ・コリヤード『懺悔録』ポルトガル語全訳注完成の目途をひとまずつけることができた2004年の年の瀬、在外研修先のリスボアから本論文の執筆者高瀬弘一郎教授に宛て一通のお手紙を差し上げた。前記の訳業はポルトガル読書人を対象としてリスボアもしくはマカオで上梓しようと考えている旨お伝えしたうえ、高瀬教授の既刊論文を一篇「序論」として載録することをお許しいただきたいという内容であった。従来例に従い、そのポルトガル語訳には私自身取り組み、十二分の査読をお願いすることもお伝えしたうえ、載録を希望する論文としては『岩波講座 日本歴史 近世1』(岩波書店, 1975年)に初めて掲載され、『キリシタン時代の文化と諸相』(八木書店, 2001年)に改訂のうえ再録された「キリシタンと統一権力」を具体的に指定させていただいた。

2005年の新春早々マカオで開かれた学会に招かれ、香港からパリを経てリスボア新大学の寄宿舎(Residência Universitária Alfredo de Sousa)に戻ってみると、いつもながら、まさに打てば響くという感じで高瀬教授からの丁寧な御返書が届いていた。私の希望を快く容れてくださったばかりか、『懺悔録』のような稀有な内容を有する書物がポルトガル語を通じてヨーロッパの読者へ紹介されることの意義を高く評価するというお言葉が添えてあった。

高瀬弘一郎(1936-)という不世出のキリシタン史家が遺しつつある業績については、これまでも言及したことがあるけれど、多少の重複を厭わずふれておくことにする¹。

¹ これまでに単行本として刊行された高瀬教授の論文集・翻訳書・啓蒙書は以下の通り。

『キリシタン時代の研究』岩波書店, 1977年

『イエズス会と日本 一』岩波書店, 1981年(大航海時代叢書第II期6)

『イエズス会と日本 二』岩波書店, 1988年(大航海時代叢書第II期7)

『キリシタンの世紀——ザビエル渡日から「鎖国」まで』岩波書店, 1993年

『キリシタン時代対外関係の研究』吉川弘文館, 1994年

『キリシタン時代の文化と諸相』八木書店, 2001年

日本には日本キリシタン史関係史料の翻訳・研究について、明治期以来の長い伝統・蓄積がある。村上直次郎・岡本良知・土井忠生・海老沢有道・岡田章雄・松田毅一ら偉大な先人たちの業績によって、たとえば『イエズス会日本年報』や『イエズス会士日本通信』、さらにルイス・フロイス『日本史』やジョアン・ロドリゲス『日本教会史』等の基礎史料を、私たちは明快な日本語で読むことができる。後二者などに関しては、日本語訳書に附された龐大かつ綿密な学問的注記のおかげで、その内容を最も詳しくかつ正しく理解しているのは紛れもなく日本人研究者であり読者人であると断言してよい。

これらの史料は、条件さえ許せば印刷され公開されて信徒の教化に資するべく用いられたものであり、いわば非機密性の史料と総称しうるであろう。この種の史料が西欧の修道院でたとえば食事時に朗読され、遙かな極東の小国で拓かれつつある“神の葡萄園”に一同想いを馳せるという、そんな情景も脳裡に浮かぶ。

上記の史料群が日本キリシタン史の研究進展に果たしてきた役割が絶大であることは言うまでもなく、これを抜きにして斯学の研究史を語ることはまったくできない。がしかし、それらが提示するキリシタン像は結局、当然のことではあるが、信者の志操堅固さを始めとする信仰美談から、果ては奇跡・殉教等に彩られた教会の“表向きの顔”だけを反映したものとならざるを得ない。そうした公開性史料に書かれていることから途方もない奇跡譚や信仰美談を適当に捨象しさえすれば、それで日本キリシタン史の大枠が浮かび上がるという、そのような考え方が疑う余地なく定着していたとすることができよう。

高瀬教授は、従来そうして定説化されてきた教会史観とはまったく異質の、より世俗的にしてリアリティーに富むキリシタン史を再構築しようという願いを学生時代から懐き、ローマ・イエズス会文書館を中心に所蔵される膨大な教会史料——それらの多くは、当時のポルトガル語・カステリーヤ語（いわゆるスペイン語）・イタリア語で記された自筆書翰であり、そこに盛られた内容のデリケートさから、永らく教会外部の俗人には披見が許されなかった、いわば非公開性、言い換えれば機密性の文書である——の解説・研究・翻訳に従事してこられた。

カトリック教会史観の護持を何よりも優先する歴史家たちが、結果として己の立場を危うくするような“都合の悪い”ことが記されているかも知れぬ、非公開性文書の紹介に積極的でなかったとしても、それは彼らの立場上むしろ当然であった、と認められる。カトリック教会側の歴史家が上記のような立場にあり、しかも史料公開の是非に関する決定権が実質上、彼らに委ねられている以上、日本キリシタン史においては、従来通り、教会のお墨付きのもとに編纂された史料を唯一の拠り所として、教会側の価値観に結果として追随する研究の再生産が繰り返されるはずであった。ポルトガルではそうしたことが現に臆面もなく継続している。

こうした斯学の動向に疑問を感じた高瀬教授は、凡百の研究者には字面をなぞることすら覚束ない教会史料を、瞠目すべき、としか評しようのない語学力で縦横に読み解き、透徹した史眼をもって、従来なんぴとも知り得なかったキリシタン史の「生の姿」を続々と明るみに出しつつある。私どもが従来キリシタン史に対して抱かされてきた通念的イメージは高瀬弘一郎の力仕事によって根本的に覆されてしまったと言ってよい。

宣教師の生の声を伝える教会史料を通じて、高瀬教授が私たちの前に否も応もなく明らかにしつつあるもの、それは、イエズス会を主体として運営された日本キリシタン教会内部の赤裸々にして驚嘆すべき実像である。具体的に例示するならば、対日軍事占領計画やら、日本教会を経済的に維持するため断

『キリシタン時代の貿易と外交』八木書店、2002年

『モンsoon文書と日本——十七世紀ポルトガル公文書集』八木書店、2006年

乎としてやめようとしなかった生糸商売やりに代表されるキリシタン宣教師の世俗的活動，年代が下るに従って深まった修道精神の退廃と聖職者の墮落，徐々に冷えてゆく日本布教への熱意と，それに反比例して高まる日本人への偏見，個人的中傷を含む教会内部の人事抗争，日本人聖職者の養成に関して大勢を占めるに至った否定的見解，カトリック諸会派の宣教師の間で見られた日本布教をめぐる主導権争いから，あげくの果て，神父や修道士のセックス・スキャンダルに至るまでの，従来は到底取り上げようもなかったであろうキリシタン史上の諸問題である。

今準備を進めつつある拙訳書の「序論」として高瀬教授から玉稿を仰ぐにあたり，おびたしい数に上る既刊論文の中から，特にこの「キリシタンと統一権力」を選んだわけは，特殊な内容の個別研究が圧倒的多数を占める高瀬教授の業績にあつて，本論がわりと通史的・概論的性格を帯び，それゆえに，ポルトガル読者人と欧米の研究者とに対し，従来のキリシタン史とは本質的に性格を異にする高瀬史学のエッセンスを要領よく披露するには最も適したものであると考えたからである。

本論の圧巻はやはり何といつても，教会未刊史料の引用が目立って増える「四」から「むすび」までであろう。一点ごとに全訳された未刊史料そのものの面白さは，高瀬教授の重厚な訳書『イエズス会と日本一』および『イエズス会と日本二』によって満喫することができる。高瀬教授の巨大な仕事の全貌を知る私のような者にとっては，強烈なインパクトと説得力に満ちた未刊史料をもっと「生で」読みたかったというのが偽らざる本音なのであるが，本文における直接引用をいたずらに増やせば，熟慮の末に行なわれている史料要約の努力を無にすることになる。それでも，教会の検閲制度のもと“毒”を抜いて編纂された公開性史料にばかり馴染んできたポルトガル人読者にとっては，本論の内容は新味に溢れ，おそらくはかなり衝撃的でさえあるのではなからうか。

キリシタン教会は江戸幕府の苛酷な迫害・弾圧によってのみ滅んだわけではない。迫害に直面した日本イエズス会の上層部は何にも増して日本人との協調・協働を尊重し，その信頼を得ることに努めねばならなかったはずだ。が信じがたいことに彼らには，己の意思で自壊・自滅を遂げようとしているのではないかと邪推したくなるような所業が，少なからず認められた。たとえば――

イエズス会巡察師ヴァリニャーノの打ち出した日本人聖職者登用の方針に大多数のヨーロッパ人同僚が反対を唱えたことは，本論に詳しく説かれている。彼らはヴァリニャーノの方針に反対する論拠のひとつとして，日本人には貞潔の観念が乏しいことを挙げる。日本人全般にそのような倫理観を求めるのなら，ヨーロッパ人イエズス会士は皆，この点において聖人まがいの“模範生”でなければならぬことになる。

ところが実情はどうであったか。イエズス会随一の日本通として知られる通事伴天連ジョアン・ロドリゲスの日本退去の裏には，長崎代官村山当安の奥方――キリシタンであった――との秘められたセックス・スキャンダルが絡んでいたらしい²。私のような品性高雅ならざる輩は，ロドリゲスの破廉恥な振る舞いに対し，そのあまりの人間臭さへ喝采を送りたくなりこそすれ，道学者ぶつてこれを弾劾しようなどつゆ思わない。ただ，そのような人物が神の第六誡（「邪淫を犯すべからず」）を説教している図はとんだお笑いぐさであり，絵に描いたようなダブル・スタンダードであろうとは思ふ。

このようなメンタリティーに関連して想起される一文がある。大の日本人嫌いであった日本布教長フランシスコ・カブラル（ポルトガル人）の，1596年12月10日付，ゴア発，イエズス会総長補佐ジョアン・アルヴァレス宛て書翰の一節。カブラルはヴァリニャーノが日本人聖職者育成のためコレジオをマカオ

² 高瀬弘一郎『キリシタン時代対外関係の研究』第13章「長崎代官村山当安をめぐる一つの出来事」参照。同書，第14章「キリシタン宣教師が用いた暗号」も参照。

に設立したことを批判している。いわく、マカオのような「無秩序・喧嘩・喧騒・争論・暴動・淫蕩」の巷に連れてこられた日本人は、そこで目撃したことを後に人々へ語り広め、「肉欲や食欲さにおけるポルトガル人の無秩序や、さらにある人々はパードレたちに対してあまり尊敬を払っていない」実情に接するであろう。さらにカブラルは一種のパードレ批判が日本人の間に存在することを次のように伝える。「パードレたちは、二つの法を説く、というより、彼らは二つの法を持っている。一つはポルトガル人たちに教えているもので、それによって彼らにあのようなあらゆる罪を犯すことを許す。いま一つは日本人たちに説いている一層厳格な法で、彼らにはポルトガル人が行なっているようなことをするのを許さない、と」³。

ポルトガル語訳に関しては、学内誌においてたびたび紹介してきた私のポルトガルにおける協力者ルシオ・デ・ソウザの誠実な査読のおかげで、これまで公にしてきた高瀬論文のポルトガル語訳以上にその完成度は高まっていると思う。

本論にあるいは直接引用され、あるいは要約引用されている教会未刊史料については、高瀬教授にその翻刻をお願いし、適宜それを脚注に転記したり本文に取り込む工夫をしたりした。本論の論旨が良質の史料によって揺るぎなく支えられていることを確認しうるのである。

高瀬教授の原文を私の理解に引き寄せるに際し、あくまでポルトガル語への変換を容易ならしめるためという名目のもと、これまた例によってであるが、御相談のうえ、原文へ僅かに手を入れることを許していただいた。高瀬教授の寛大なお計らいに対し衷心より感謝と敬意を捧げる。このたびの日本語原文にはその改変を反映させてある（紙幅の都合により日本語原文は次号に掲載する）。

ポルトガル語訳

Preâmbulo

Inúmeros progressos académicos têm sido realizados relativamente à História da Igreja Cristã (ou para melhor dizer Kirishitan) no Japão não só pelos pesquisadores eclesiásticos mas também pelos estudiosos seculares. Será então que os trabalhos anteriores conseguiriam responder claramente a todas as dúvidas e questões concebidas por nós acerca da História Kirishitan no Japão? Não necessariamente, segundo me parece. Não se pode negar que, quanto aos estudos relativos ao Século Cristão do Japão, até ao presente, os maiores esforços têm sido feitos no sentido de esclarecer os aspectos das actividades próprias e pertinentes aos verdadeiros objectivos da Igreja Católica, como por exemplo, as obras evangelizadoras e de misericórdia concretizadas pelos missionários, a vida religiosa dos crentes, as actividades realizadas pelos padres e irmãos nas esferas de ciência, pensamento, educação doutrinal, etc, etc. Não se deve esquecer, porém, que as actividades eclesiásticas e seculares dos missionários foram muito diversas, afigurando-se-me muito importante e indispensável

³ 高瀬弘一郎訳『イエズス会と日本 一』181～182頁。

esclarecer «outros» aspectos importantes relacionados com as actividades dos evangelizadores no Japão, até recentemente quase inacessíveis para os investigadores, em especial, seculares. Para cumprir esta tarefa, teremos que exercer mais esforços para nos conseguirmos aproximar de uma realidade “mais real” no que diz respeito à missionação japonesa, considerando quais os principais elementos concebidos e praticados pelas personagens ibéricas quinhentistas e seiscentistas. Os sobreditos elementos são integrados na política de evangelização católica levada a cabo no âmbito espiritual dos Descobrimentos e Expansão Ultramarina. Este método de investigação, que procura alcançar uma realidade “mais real”, poderá contribuir decisivamente para que possamos ultrapassar uma tendência, por vezes visível entre os pesquisadores da História Kirishitan no Japão, que procura distinguir facilmente o bem do mal, assente no facto de o assumir-se uma posição em favor da Igreja é necessariamente bom e o seu contrário é necessariamente mau.

Tal parcialidade existente na pesquisa encontra-se ligada àquela no que diz respeito às fontes e aos documentos até agora utilizados. Para investigar a História Cristã no Japão, deve-se depender quase inteiramente das fontes não japonesas escritas pelos missionários europeus. Recordando a história da pesquisa até hoje efectuada nesta área de estudo, os investigadores, é certo, têm concretizado os seus estudos baseando-se nas colectâneas das fontes e histórias compiladas pelas autoridades e personagens eclesiásticas. Escusado será dizer que é enorme a contribuição feita por tais colectâneas e histórias para o aprofundamento da História Kirishitan e das relações nipo-europeias nos séculos XVI e XVII, mas pode-se com verdade afirmar que tais colectâneas e histórias, por serem compiladas conforme ao conceito de valores eclesiástico, não dizem nada sobre aquilo que não interessa às autoridades eclesiásticas nem aquilo que não se harmoniza com os próprios objectivos da Igreja Católica nem aquilo que não é conveniente aos interesses da cristandade, ou que, mesmo que se refiram a tais assuntos, sempre funcionava aí uma consideração especial de maneira a que não prejudicassem o proveito eclesiástico em geral. Isso significa, pelo contrário, que tais obras editadas e compiladas tratam de modo intencional das coisas e assuntos adequados para o bem das autoridades eclesiásticas com uma maior ênfase do que é devido, pelo que, na maioria dos casos, umas narrativas de índole literário-religiosa, como por exemplo, aquela sobre os martírios e mártires são descritas de maneira pormenorizada em demasia.

Por conseguinte, é impossível esclarecer a verdadeira realidade dos trabalhos evangélicos da Igreja Kirishitan só através dos sobreditos livros e obras compilados. Vários aspectos e vicissitudes relativos à História da Igreja Cristã no Japão, aspectos e vicissitudes essas que até recentemente não têm sido esclarecidos, serão com uma maior integridade divulgados e interpretados através dos esforços de recorrer-nos às vastas fontes inéditas eclesiásticas não publicadas em obras impressas. Mesmo que as sobreditas fontes que tenho conseguido consultar e estudar, reconheço eu, sejam aquilo que é como «uma pele de todas as peles pertencentes a nove vacas», como nós dizemos num adágio japonês, penso seguramente que o que vou mencionar abaixo deve constituir um novíssimo adição aos numerosos trabalhos já concretizados. A razão porque tenho conseguido realizá-lo reside justamente no

privilégio de que felizmente tenho gozado de consultar as sobreditas fontes inéditas eclesiásticas.

1. Uma Característica da MissionaçãO Cristã (Kirishitan) no Japão

A missionaçãO cristã (Kirishitan) no Japão é um fruto da ExpansãO Ultramarina Portuguesa e Castelhana. A razãO pela qual os missionários cristãos conseguiram efectuar as actividades evangelizadoras no Japão reside exactamente no facto de os poderes ibéricos se terem dilatado ao Extremo Oriente. Foi completamente impossível os missionários realizarem as suas actividades evengelizadoras independentemente das potências das coroas ibéricas de entãO, e a ExpansãO Ultramarina dos impérios ibéricos também se tornou possível através do patrocínio das autoridades espirituais da Igreja. As coroas portuguesa e castelhana efectuavam as empresas seculares tais como a navegaçãO, a conquista, a colonizaçãO, o comércio, etc. e a Igreja Católica tinha como objectivo a conversãO dos gentios habitados em respectivas terras colonizadas. O que é digno de notar é que as duas empresas eclesiástica e secular, as quais parecem essencialmente diferentes uma a outra, nãO só foram promovidas de uma forma conjunta na qualidade de uma empresa oficial, mas também foram justificadas e autorizadas pela dignidade espiritual do Papa, o qual aspecto constituía um factor caracterizador do período dos Descobrimentos. Quanto ao patrocínio para com as actividades evangelizadoras realizadas pelos missionários, o Papa quase sempre limitava-se a fazê-lo de maneira espiritual pelo menos até à segunda metade do século XVII, e praticamente quase todas as missionações foram realizadas por várias ordens católicas através da obtençãO da ajuda financeira das coroas ibéricas e de maneira a que se integrassem nas sobreditas empresas seculares promovidas pelas ditas coroas. Isto pode ser dito quase inteiramente no que se concerne à evangelizaçãO efectuada no Japão pelos missionários europeus nos séculos XVI e XVII. Um dos elementos mais importantes que caracterizavam a empresa evangelizadora no Japão reside no facto de os missionários cristãos terem concretizado as suas actividades eclesiásticas no Japão na qualidade de uma empresa oficial das duas nações ibéricas e os mesmos missionários, por consequência disso, nãO terem conseguido tornar-se nos mestres puramente espirituais ultrapassando todas as coisas materiais, tendo sido restringidos e controlados pelos interesses nacionais dos impérios ibéricos que os patrocinavam nãO só espiritualmente mas também financeiramente. Se nãO tivermos em conta o que tenho acima mencionado, parecer-me-á quase impossível atingirmos uma compreensãO adequada e correcta relativamente à política opressiva adoptada pelos poderes unificadores do Japão quinhentista e seiscentista.

Pois bem. Poder-se-ia afirmar que o sistema que caracteriza a missionaçãO católica de entãO foi o do «Padroado». O dito sistema, tendo ocorrido na Europa medieval mediante as relações históricas entre os senhores feudais e a Igreja Católica, floresceu mais nomeadamente na Península Ibérica no processo da Reconquista contra os mouros e ainda prosperou no

período dos Descobrimentos. Através do sistema do Padroado, os Papas obrigaram, por um lado, as coroas portuguesa e castelhana a promover a missionação a ser concretizada nas terras novamente descobertas e a sustentar as despesas necessárias para ela, cedendo-lhes, por outro lado, vários direitos relativos à administração eclesiástica e aos assuntos humanos da Igreja fundada aí, tais como o de estabelecer as dioceses, o de recomendar as importantes personalidades religiosas inclusive os bispos, etc, etc⁴.

Os Papas no período dos Descobrimentos, juntamente com a cessão gradual dos sobreditos direitos pertinentes ao Padroado para as coroas ibéricas, ofereceram-lhes o privilégio de promover as empresas seculares tais como a navegação, a conquista, a colonização, o comércio, etc. de uma forma monopolizada nos seus respectivos domínios já colonizados. Meramente na qualidade de um dos favores especiais cedidos pelos Papas para os senhores feudais ibéricos, senhores feudais esses que contribuíram para o engrandecimento da cristandade através da aniquilação dos gentios, afigura-se-me bastante significativo o facto de que as sobreditas empresas expansionistas passaram a ser justificadas e autorizadas pela dignidade papal. Nasceu assim, segundo creio, a característica acima mencionada de as diferentes actividades eclesiástica e secular terem sido avançadas de uma forma intimamente ligada uma a outra na qualidade de uma empresa oficial ou nacional.

Quanto à demarcação entre Portugal e Espanha, as duas coroas, após várias circunstâncias e pormenores, assinaram por fim o Tratado de Tordesilhas a 7 de Junho de 1494, fazendo com que pertença a Portugal o domínio ao leste do meridiano passando 370 léguas ao oeste do arquipélago do Cabo Verde no Oceano Atlântico e fique com Espanha o domínio ao leste do mesmo meridiano. Este tratado foi aprovado mais tarde pelo Papa Julius II através da bula *Ea quæ pro bono* datada a 24 de Janeiro de 1506. Assim o mundo dos gentios foi dividido em dois, ficando decidido que quaisquer terras do mundo pertenceriam potencialmente a Portugal ou a Espanha e restando-lhes apenas fazer delas as suas respectivas colónias sob a dignidade papal, se tivessem podido conquistá-las por suas próprias armas. A conquista neste sentido significava não só a conquista militar mas também a evangelização católica, a qual se identificaria com a conquista espiritual. Cria-se seguramente que apenas a conquista militar ligada estreitamente com a conquista espiritual conseguiu aperfeiçoar e completar as empresas oficiais dos impérios ibéricos.

As regras relativas à demarcação existente no Oceano Atlântico não mencionam nada sobre a demarcação a existir no hemisfério oriental. Por conseguinte, expandindo-se os poderes português e castelhano respectivamente para o leste e para o oeste e encontrando-se os mesmos poderes nalguma terra do Extremo Oriente, escusado será dizer, foi inevitável que ocorreriam complicações entre as duas potências em torno da posse das respectivas terras onde se encontravam. No hemisfério oriental, aquilo que tinha influência foram os resultados concretizados pelas respectivas potências relativamente à conquista, ao comércio, à

⁴ António da Silva Rêgo, *O Padroado Português do Oriente*, Lisboa, 1940, c. I. C. R. Boxer, *The Portuguese Seaborne Empire 1415-1825*, London 1969, c. X.

missionação, etc., podendo-se dizer que tais resultados contribuíram grandemente para resolverem os problemas acerca da posse territorial, tendo em conta a relação de forças das duas potências em respectivas terras onde se encontravam.

Falando da missionação japonesa, quer no que diz respeito à vinda dos portugueses ao Japão, quer no que diz respeito à sua missionação iniciada por São Francisco Xavier e efectuada pelos jesuítas patrocinados pela coroa portuguesa, a sua origem era grandemente por mero acaso. Mas uma vez dada em curso a sua missionação, o Japão passou praticamente a pertencer ao território português a partir do ponto de vista tanto eclesiástico como comercial, o qual fenómeno foi reconhecido pelo Papa como um facto consumado⁵. Volvido assim o tempo de aproximadamente meio século, a influência espanhola passou a atingir o Japão por via das Ilhas Filipinas, tendo sido desenvolvido nas terras nipónicas um violento conflicto de rivalidade entre as duas potências ibéricas. Pode-se com verdade afirmar que o dito conflicto de rivalidade, no qual se disputava a «obtenção» do Japão e se envolviam as personalidades relacionadas não só eclesiásticas mas também seculares, constituiu um dos factores mais importantes que implicavam a missionação japonesa numa grande confusão, fazendo necessariamente com que os dominadores políticos japoneses tivessem uma séria desconfiança e os «hereges» holandeses e ingleses, os quais sempre tinham o intuito de extirpar as influências católicas das terras nipónicas, inventassem um pretexto para abusar da sua fraqueza proveniente da sobredita rivalidade.

2. A Base Financeira para a MissionaçãO Cristã (Kirishitan) no Japão

O facto de a missionação japonesa pela Companhia de Jesus ter sido promovida na qualidade de uma das empresas oficiais da Coroa Portuguesa pode ser facilmente compreendido através de uma rápida olhada para a realidade da sua base financeira.

Os jesuítas obtiveram as despesas necessárias para realizar a sua missionação japonesa através de várias maneiras. Quanto à renda fixa, excluindo as esmolas feitas de vez em quando e de forma irregular, ela foi composta pela pensão fornecida pelos reis de Portugal-Espanha, a pensão oferecida pelo Papa, as entradas provenientes dos bens imóveis que a Companhia de Jesus possuía na Índia, Malaca, Macau e no Japão, o ganho oriundo do trato que os jesuítas efectuavam principalmente entre Macau e o Japão, etc. etc. Quanto à pensão oferecida pelos reis de Portugal, eles deviam ter assumido a responsabilidade de patrocinar financeiramente os jesuítas devido à obrigação relativa ao Padroado Português do Oriente, mas pode-se confirmar

⁵ Takase Kōichirō [高瀬弘一郎], “Daikōkai-jidai Iberia-ryōkoku no sekai-nibunkatsu-seifuku-ron to Nihon” [「大航海時代イベリア両国の世界二分割征服論と日本」] (in *Shisō* [『思想』], núm. do mês de Outubro de 1971), p.75. Takase Kōichirō, *Kirishitan-jidai no kenkyū* [『キリシタン時代の研究』], Iwanami Shoten [岩波書店], 1977, primeira parte, c. I.

que a importância das pensões que os reis de Portugal ofereceram para a Companhia de Jesus no Japão foi apenas a seguinte: os reis de Portugal, até ao ano de 1574, forneceram em Malaca anualmente 600 pardaus (500 ducados), até aumentar a sua importância para a de 1 000 ducados no mesmo ano. Quando o rei castelhano Felipe II anexou Portugal no ano de 1580, ele decidiu fornecer adicionalmente a pensão de 1 000 ducados em Goa, a qual foi levada ao Japão após o ano de 1581⁶. No alvará datado a 2 de Agosto de 1607 o rei de Portugal-Espanha ordenou que uma nova pensão de 2 000 cruzados (2 000 ducados) fosse fornecida na Índia⁷, assim atingindo a importância nominal das pensões anuais totais a de 4 000 ducados, mas sempre foi muito mau o seu fornecimento. A sobredita importância nominal das pensões anuais, por conseguinte, foi escassa em demasia para financiar as despesas anuais da Companhia de Jesus no Japão, as quais atingiam a importância de mais de 10 000 ducados. Pode-se comentar que os reis de Portugal não cumpriam satisfatoriamente a obrigação financeira na qualidade de patrocinador da Igreja novamente fundada no Japão. Foi por este motivo que a Companhia de Jesus no Japão foi levada a buscar outros modos de ganhar dinheiro através da sua indústria.

Quanto à ajuda financeira do Papa, a pensão anual de 4 000 ducados começou a ser fornecida em Madrid a partir do ano de 1583, tendo aumentado só uma vez no ano de 1585 para a importância de 6 000 ducados, mas depois desse ano se fez uma revisão, tendo sido reduzida para a de 4 000 ducados⁸. Escusado será dizer que tanto o seu fornecimento como o envio de dinheiro também não foram assegurados.

Quanto à renda dos bens imóveis, ela significa a renda proveniente dos terrenos e casas alugados, os quais a Companhia de Jesus compravam por seus fundos ou possuíam como donativos. A renda mais importante é aquela proveniente dos terrenos existentes na Índia Portuguesa. Os jesuítas, desde que adquiriram aí as primeiras propriedades na primeira metade dos anos de 70 do século XVI, aumentaram-nas gradualmente, ora comprando-as pouco a pouco mais tarde, ora adquirindo-as como donativos. Em suma: a renda proveniente das propriedades na Índia Portuguesa rodeava-se pela importância de 1 000 a 2 000 ducados desde os anos de 80 do século XVI até aos inícios do século XVII, rodeando-se pela de 3 000

⁶ Joseph Wicki, *Documenta Indica*, VIII, Romae, 1964, p.481; IX, 1966, pp.520, 521. Alexandre Valignano, *Apología en la qual se responde a diversas calumnias que se escribieron contra los Padres de la Comp.^a de Jesus de Jappón y de la China*, 1598, Archivum Romanum Societatis Iesu, Jap.Sin.41, ff.79v., 85. A. Valignano, *Apología de la Compañía de Jesús de Japón y China (1598)*, José Luis Álvarez-Taladriz ed., Ōsaka 1998, pp.188, 189, 203. Carta redigida pelo padre Coelho no Japão, datada a 13 de Outubro de 1581 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin, 9-I, f.41v.).

⁷ J. H. da Cunha Rivara, *Archivo Portuguêz-Oriental*, fascículo 6.º, Nova Goa, 1875, Reprint, New Delhi, 1992, pp.795, 796.

⁸ A. Valignano, *Apología*, Jap.Sin.41, f.85. A. Valignano, *Apología*, J. L. Álvarez-Taladriz ed., pp.203, 204.

ducados desde os anos de 10 do século XVII até aos de 30 do mesmo século⁹. Para além do sobredito, havia outras rendas provenientes dos terrenos e casas alugados em Macau, Malaca, vários locais no Japão e em Portugal, cuja importância não é tão relevante por ser a soma proveniente deste investimento muito reduzida.

A renda proveniente do comércio efectuado pelos jesuítas é muito mais importante do que outras rendas, tanto por ter sido absolutamente maior a sua importância como por ter constituído um dos elementos que caracterizavam nitidamente a sua missão japonesa. Este trato realizado pela Companhia de Jesus no Japão abrangia vários aspectos, mas o mais importante era o trato da seda crua efectuado entre Macau e Nagasaki [長崎]. Este trato foi aquilo que assumia um feitiço de tomarem parte nas actividades comerciais dos portugueses que importavam a seda crua de produção chinesa ao Japão com a base em Macau. Tal trato efectuado pela Companhia de Jesus inciou a partir da segunda metade dos anos de 50 no século XVI alguns anos após a vinda de São Francisco Xavier ao Japão e o próprio apóstolo aceitou umas toneladas de pimenta do capitão de Malaca antes da sua partida daí para o Japão, tendo financiado as despesas necessárias para a primeira evangelização no País do Sol Nascente através do lucro da sua venda. Assim sendo, o mestre Francisco mostrou não pequeno interesse para com o valor do mercado japonês desde os primeiros dias da sua estadia no Japão, e sugeriu as autoridades relacionadas a necessidade da fundação de uma feitoria em Sacai [堺], tendo-lhes avisado quais eram os melhores produtos para a exportação ao Japão. Poderíamos concluir que tal maneira da missão japonesa pelos jesuítas estreitamente ligada ao trato dos portugueses já tinha iniciado aquando da vinda de São Francisco Xavier ao Japão.

As actividades comerciais iniciadas pela Companhia de Jesus no Japão na segunda metade dos anos de 50 no século XVI abrangiam, nos seus começos por enquanto, apenas a seda crua. A Companhia de Jesus, relativamente à participação no trato com o Japão, fixou um contrato de uma forma definitiva com a cidade de Macau no ano de 1579. Apesar de a participação dos jesuítas no comércio da seda crua efectuado entre Macau e Nagasaki ter sido assaz danosa e prejudicial para os proveitos da cidade de Macau, ela foi, por fim, obrigada a reconhecê-la e permiti-la. A sua razão, segundo creio, residiria no facto de que, enquanto a máxima quantidade anual da seda crua exportada pela cidade de Macau ao Japão atingia 1 500 ou 1 600 a 2 000 picos (um pico equivalia a 60 quilogramas aproximadamente) no seu apogeu, a quantidade distribuída à Companhia de Jesus no Japão era apenas 50 ou 60 picos, a qual porção, para a cidade de Macau, parecia não causar tanto dano nem prejuízo; os colonizadores portugueses, para além disto, de acordo com a política nacional de então, foram obrigados a prestar uma certa contribuição pecuniária para os missionários católicos; e ainda mais, a fundação de uma sociedade cristã mediante as actividades evangélicas dos jesuítas perto

⁹ Takase Kōichirō, “Kirishitan-jidai, Indo ni okeru Nihon-Iezusukai no shisan ni tsuite” [「キリシタン時代, インドにおける日本イエズス会の資産について」], jō [上] & ge [下] (in *Shigaku* [『史学』], 46-1; 46-2). Takase Kōichirō, *Kirishitan-jidai no kenkyū*, op. cit., segunda parte, c. V.

dalgum porto japonês onde embarcavam os navios portugueses deveria criar e prometer um bom ambiente para o trato eficaz a ser despachado pelos comerciantes portugueses.

Se a Companhia de Jesus no Japão tivesse sempre guardado as regras do sobredito contrato e tivesse efectuado o seu comércio dentro dos seus limites, ele não se teria exposto à acusação tão fervorosa e violenta. Os jesuítas, para além da seda crua, chegaram a comerciar gradualmente em várias sortes dos tecidos de seda e de algodão, o ouro, o chumbo, o mercúrio, as porcelanas, o almíscar, o âmbar cinzento, etc., até se tendo atrevido a fazer, no Japão, a compra expeculativa, confiada a crédito, da seda crua e a vendê-la mais tarde por preços mais elevados e tendo alargado a sua extensão comercial não só no Japão mas também até à Índia, Manila etc. com a base em Macau. Realizava-se o trato internacional de então dependendo-se das técnicas imperfeitas de navegação, pelo que ele não podia escapar a uns elementos perigosos e inseguros, mas, apesar disso, a importância do comércio, como fonte de receita que a Companhia de Jesus possuía no Japão, sempre ultrapassava absolutamente a dos outros recursos financeiros. Gradualmente as acusações contra as sobreditas actividades comerciais tornaram-se mais violentas e fervorosas tanto no interior da Companhia de Jesus como externamente, a cúpula da Companhia de Jesus no Japão recusou decisivamente aceitar a opinião em favor da abolição integral do comércio em questão. Nos anos de 60 e 70 do século XVI a Companhia de Jesus no Japão não só financiava as despesas necessárias para a sua missão através dos lucros oriundos do dito trato mas também conseguia fazer os imensos fundos pela acumulação do remanescente. Mesmo que a sua situação financeira tivesse piorado devido ao crescimento súbito das despesas para a missão, em especial, após a vinda do Padre Visitador Alessandro Valignano, o ganho proveniente do trato sempre mantivera a segura importância como fonte de receita de que a Companhia de Jesus gozava no Japão. O lucro deste financiamento conseguiu até financiar dois terços das despesas exigidas pela missão no País do Sol Nascente¹⁰. Como a Companhia de Jesus no Japão, provavelmente por ter acesso directo a esta “mina de ouro”, parecia gozar de uma situação relativamente boa em comparação com a das outras áreas evangelizadas, pelo que prestava até uma certa ajuda financeira para com os seus colegas eclesiásticos na China ainda nos anos de 20 do século XVII.

Assim tendo visto quais eram os principais recursos da Companhia de Jesus no Japão, temos confirmado o facto de a base financeira dela ter residido quase inteiramente nas actividades comerciais efectuadas na esfera de influência portuguesa, salvo umas pequenas excepções tais como as pensões dos Papas, etc. É um facto digno de consideração que foi pequena a soma que os reis de Portugal forneceram em dinheiro, mas que, foi realmente graças à autorização que os jesuítas obtiveram aos reis de Portugal que eles concretizaram as suas actividades comerciais e adquiriram os terrenos na Índia Portuguesa. Para os jesuítas no

¹⁰ Takase Kōichirō, “Kirishitan-kyōkai no bōeki-shūnyū-gaku ni tsuite” [「キリシタン教会の貿易収入額について」] (in *Shakai Keizai Shigaku* [『社会経済史学』], 40-1). Takase Kōichirō, *Kirishitan-jidai no kenkyū*, op. cit., segunda parte, c. VIII.

Extremo Oriente, o acto de proteger a esfera de influência económica portuguesa e fortalecê-la significava justa e directamente a protecção das suas próprias actividades evangélicas. Os conflitos de rivalidade relacionados com a «obtenção» do Japão que os jesuítas do Padroado Português desenrolaram juntamente com os mendicantes do «Patronato» Espanhol – tais como os franciscanos, os dominicanos e os agostinhos – não são outros senão aquilo que se desenvolveu assumindo-se um dinamismo e movimento por parte dos jesuítas e portugueses que procuravam proteger a sua esfera económica já assegurada no Extremo Oriente e rejeitar daí as influências espanholas, as quais sempre tentavam interrompê-la.

3. Os Poderes de Voda Nobunaga e Toyotomi Fideyoxi e a Cristandade

Voda Nobunaga [織田信長] não exerceu nenhuma opressão contra a cristandade durante a sua vida. Nobunaga, tendo conseguido dominar apenas o Gokinai [五畿内] – os cinco reinos perto da Corte, isto é, Yamaxiro [山城], Xettçu [摂津], Cauachi [河内], Idzumi [和泉] e Yamato [大和] – e alguns reinos vizinhos um pouco antes da sua morte violenta no ano de 1582, não prestou tanta atenção para as circunstâncias da ilha de Kiüxü (Kyūshū) [九州] onde se encontrava a sede da Igreja Católica no Japão. Para Nobunaga, os missionários jesuítas e os seus discípulos com quem se encontrava de vez em quando em Kiōto [京都], Adzuchi [安土], Ghifu [岐阜], etc. não foram outros senão a existência não prejudicial nem danosa, existência essa que apenas lhe satisfazia o orgulho, através do juramento de fidelidade absoluta, além da curiosidade para com as coisas exóticas.

A Igreja Cristã (Kirishitan) no Japão, porém, conheceu uma nova fase no seu destino no tempo de Toyotomi Fideyoxi [豊臣秀吉] face ao édito anti-cristão por ele promulgado no mês de Julho de 1587. Quando fazemos uma reflexão sobre a política de Fideyoxi para com a cristandade, temos que prestar a devida atenção para o facto de ter sido promulgado o sobredito édito anti-cristão logo depois de ter terminado a conquista total de Kiüxü. Simultaneamente, Fideyoxi confisca a cidade de Nagasaki aos jesuítas, tendo feito dela um território sob a sua jurisdição directa; ordenou apenas a expulsão dos missionários, não tendo proibido de modo nenhum a conservação da fé por parte dos crentes e tendo manifestado com ênfase de maneira intencional a sua vontade de estimular o trato e de encorajar a vinda dos mercadores portugueses como anteriormente. Quer dizer: o novo alvo que Fideyoxi pretendia visar após a conquista de Kiüxü não foi outro senão o trato Nanbam [南蛮貿易] efectuado no porto de Nagasaki sob o seu controle exclusivo. A razão porque Fideyoxi confiscou a cidade de Nagasaki, a qual já se tinha tornado num território eclesiástico administrado pelos jesuítas, poderia ser explicada claramente pelo seu forte desejo de adquirir e dominar seguramente a cidade de Nagasaki como ancoradouro já frequentado regularmente pelos navios portugueses.

Quando Fideyoxi cedeu uma audiência aos mercadores portugueses em Yatçuxiro [八代] no reino de Figo [肥後] (actual prefeitura de Kumamoto [熊本]) um pouco antes da promulgação do édito anti-cristão, isto é, no mês de Maio de 1587, transmitiu-lhes o seu desejo de convidar os navios portugueses no porto de Sacai ou nalgum outro porto perto de Vôzaca [大坂] (actual Ōsaka [大阪]) onde se encontrava a sua base¹¹. Tendo provavelmente percebido, porém, a impossibilidade de convidar os navios portugueses ao Gokinai, Fideyoxi teria decidido confiscar resolutamente o porto de Nagasaki, julgando que o trato Nanban – muito lucrativo tanto para os portugueses como para Fideyoxi – ainda se efectuaria continuamente no mesmo porto.

Pois bem. A cidade de Nagasaki – originariamente uma pequena vila dos pescadores – foi fundada como ancoradouro dos navios portugueses no ano de 1570 e foi cedida pelo primeiro dáimio cristão Vômura Sumitada [大村純忠] para a Companhia de Jesus no ano de 1580, assim tendo chegado a assumir nitidamente a fisionomia de sede estratégica dos portugueses e jesuítas residentes no Japão. Para os mercadores portugueses, os quais bem apreciavam o valor elevado do comércio entre Macau e Nagasaki, esta cidade constituiu praticamente uma importante base que competia com os outros portos de ocupação portuguesa tais como Goa, Malaca, Macau, etc., ainda que não se tivesse tornado num território puramente português. Os portugueses fizeram de Nagasaki o seu único ancoradouro após a sua fundação, pois, a cidade de Nagasaki, para além de ter sido dotada de várias condições geográficas favoráveis, não só possuía, antes de mais nada, a sede da Companhia de Jesus no Japão mas também formava uma sociedade de índole cristã bastante segura em parte devido ao constante apoio por parte da Igreja. Poder-se-ia dizer de maneira paradoxal que foi possível ter sido formada tal sociedade cristã segura pelo motivo de se ter tornado no ancoradouro dos navios portugueses. Para os mercadores portugueses, foi extremamente desejável efectuarem o seu trato agasalhando-se no local tão privilegiado e a razão porque o trato entre Macau e Nagasaki conseguia manter a sua prosperidade por tanto tempo, segundo creio, poderia ser explicada pelo que acima mencionei. Isto criava uma característica bem marcante do trato em questão, onde os jesuítas serviram de intermediário comercial entre os portugueses e os japoneses. O facto de os jesuítas terem sido a voz activa nas negociações avançadas em Nagasaki contribuiria, sem dúvida nenhuma, para o facto de os japoneses terem procurado obter a amizade dos jesuítas, de forma a que pudessem comprar os preciosos produtos embarcados nos navios portugueses. Alguns membros da Companhia de Jesus, escusado será dizer, mostraram-se contrários à sobredita incumbência de índole secular, tendo afirmado que ela seria completamente incompatível com o seu voto da pobreza, mas a maioria dos jesuítas, os quais não escolhiam meios para cumprirem o seu objectivo e consideravam o trato como um bom instrumento para a evangelização eficaz, não deixaram de aderir à opinião de o sobredito cargo fortalecer a posição e influência dos jesuítas em geral.

¹¹ Okamoto Yoshitomo [岡本良知], *Jūroku-seiki nichī-ō-kōtsū-shi no kenkyū* [『十六世紀日欧交通史の研究』], Rakkō Shobō [六甲書房], 1942, pp.470-472.

Por outro lado, a partir do ponto de vista dos dominadores japoneses, a cidade de Nagasaki parecia ser uma cidade autónoma, cuja defesa foi reforçada quase exclusivamente pelos cristãos, encorajados pela Igreja Católica. Aí os cristãos não só edificaram as casas mas também equiparam os navios de guerra portugueses e as munições. Parecia também ter-se tornado numa cidade religiosamente fortalecida, o qual fenómeno causava a Fideyoxi forte incómodo por as forças colonizadoras portuguesas já terem invadido e ocupado uma porção territorial do Japão. Poderíamos dizer que a confiscação da cidade de Nagasaki que Fideyoxi exerceu de maneira decisiva, aproveitando a boa oportunidade da conquista integral da ilha de Kiūxū, foi uma medida tão justa como natural.

Como já mencionámos acima, Fideyoxi procurava a conservação do trato português em Nagasaki, pelo que mesmo ele não conseguiu destruir de uma vez todas as ordens já estabelecidas desde anteriormente bem peculiares a esta cidade, apesar de ter colocado Nagasaki sob a sua jurisdição directa. Pelo contrário, Fideyoxi não se esqueceu de tomar umas medidas conciliatórias para com os seus habitantes, tendo-lhes continuado a isentar o imposto residencial, e não fez quase nenhuma interferência no organismo eclesiástico pré-existente. Este facto pode ser confirmado no relatório redigido no ano de 1592 pelo Padre Visitador Valignano, o qual escreve: «aunque el puerto de Nagasaki quedó para Kwanpakudono (Quanbacudono [関白殿]), todavia no se hizo ninguna mudanza en él acerca de la cristiandad»¹². Ainda que seja certo Fideyoxi ter desejado a continuação do trato português, isso não significa que Fideyoxi desejava conservar o trato como se tinha efectuado desde antigamente, no qual os jesuítas serviram de intermediários comerciais. A nova maneira do trato desejada por Fideyoxi foi aquela em que ele conseguiu comprar de forma directa e exclusiva os produtos transportados pelos portugueses através do envio do seu comissário ao porto de Nagasaki. No que tenho mencionado acima residiria, segundo creio, a razão mais principal porque Fideyoxi mandava a expulsão dos jesuítas no sobredito édito anti-cristão.

Esta intenção suposta de Fideyoxi ficou manifesta tão cedo aquando da vinda a Nagasaki do navio português capitaneado por Jerónimo Pereira no Verão do ano de 1588. Fideyoxi enviou Conixi Riūsa [小西立佐 (隆佐)], pai do dáimio cristão Agostinho Conixi Yukinaga [小西行長], a Nagasaki, tendo-lhe encomendado a importância de mais de 200 000 ducados e fez com que comprasse monopolizadamente 900 picos da seda crua por preços injustamente baixos, tendo abusado do seu poder absoluto. Ele tomou outra medida de proibir que nenhuma outra pessoa fizessem as suas negociações até ter acabado com a compra para si próprio¹³. Parece-me que a quantia de 900 picos pode ter sido a maioria da quantia transportada pelo presente navio, tendo em conta a quantia regular da seda crua importada

¹² Alejandro Valignano, *Adiciones del Sumario de Japón*, José Luis Álvarez-Taladriz ed., Ōsaka, 1954, p.413. Cf. Okamoto Yoshitomo, *Jūroku-seiki nichī-ō-kōtsū-shi no kenkyū*, p.637.

¹³ *Cartas que os Padres e Irmãos da Companhia de Jesus escreverão dos Reynos de Japão & China aos da mesma Companhia da Índia, & Europa*, segunda parte, Évora, 1598, f.244. Cf. Okamoto Yoshitomo, *Jūroku-seiki nichī-ō-kōtsū-shi no kenkyū*, p.681.

anualmente pelos portugueses. Tal maneira de fazer a compra de forma monopolizada da seda levada a cabo por Fideyoxi no ano de 1588 constitui um caso completamente excepcional por ter quebrado a prática habitual relativa às negociações guardada desde anteriormente. Por consequência disso, teve lugar uma grande perturbação e murmuração na cidade de Macau, que recebeu a notícia surpreendente, e, o capitão e os cidadãos não desejaram enviar a nau do trato ao Japão no próximo ano de 1589 por ter sido tão reduzido o lucro proveniente do trato realizado no ano de 1588, tendo partido um navio para o México, o qual devia ter navegado para Nagasaki.

Face a tal situação perturbadora, o Padre Visitador Alessandro Valignano houve por bem enviar um mensageiro a Fideyoxi e informar-lhe que a cidade de Macau não lhe enviaria a seda crua por Fideyoxi não só ter cometido a perseguição contra a Igreja mas também tê-la comprado exclusivamente por preços só por ele fixos e não ter permitido que se vendesse a nenhuma outra pessoa; e que, se Fideyoxi quisesse a continuação do trato português, deveria não só permitir a estadia dos jesuítas mas também garantir a liberdade habitual das negociações para com os portugueses¹⁴. Trata-se de um stratagem engenhoso por parte deste jesuíta que pretendia fazer bom aproveitamento da presente situação. Fideyoxi, tendo ficado desapontado com o cancelamento do serviço marítimo no ano de 1589, foi obrigado a mudar de ideia relativa à influência comercial exercida pelos jesuítas. Ainda no ano de 1591

¹⁴ Carta redigida pelo padre Alessandro Valignano em Macau, datada a 28 de Julho de 1589 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.11-I, f.126).

«Tadavia Nuestro Señor permitiera que esta viage se haga aunque sea con partir hasta los diez de agosto de aqui sin duda nos hemos de embarcar / (f.126) Aunque imos a mucho riesgo confiando en Nuestro Señor que nos ha de llevar alla y entonces sera esta trassa hecha por Dios porque lo que este año se deviera hazer, para bien de la christiandade de Japon y aun desta Ciudad era embiarse una embarcacion a Japon sin ninguna seda en que yo fuesse con los señores Japones y la embaxada y presente que el Virrei manda para Quambacundono y que la Ciudad embiasse otro hombre para hazer saber a Quambacundono que este año no embiava seda como era costumbre, por las sinrazones que S. A. tenia hecho a los portugueses, per seguinte a los Padres y destruyendo las Iglesias y las cruces y tomandole la seda por el precio que quiso sin le dar facultad de venderla a otra, y que se S. A. queria que fuessen los portugueses como siempre fueron con su seda y otras mercaderias avia de tornar bolver a dar licencia para estar en Japon Padres y edificar sus Iglesias, pues los portugueses son christianos y no pueden bivar sin Padres y sus Iglesias, y que tambien los avia de libertar para que pudiessen vender a quien quiziessen su seda como siempre hizieron y que para solo se hazer esto y embiarle la embaxada y presente que el Virrei embiava, yva este navio este año, y que si no hiziesse lo que le pedian no avian de yr mas alla, porque con este recaudo sin duda abrandaria el Quambacundono por la grande interez y honrra que pierde no yendo esta nao a Japon, porque todo Japon se alevantaria y daria cen mil males del, no teniendo otra cosa mejor que el comercio desta nao, mas como en esta via el interes del Capitan y del pueblo no se pudiera esto en ninguna manera alcanzar si Nuestro Señor no ordinara de la manera que ordeno y si agora partiere este junco estara hecho lo que deseavamos y como esta fue trasa de Dios aun spero que se ha de dar modo con que vamos posto que muy tarde mas su divina providencia nos llevara alla.» (Jap.Sin.11-I, ff.125v., 126)

Fideyoxi tentou fazer outra compra monopolizada do ouro transportado pelo navio português capitaneado por Roque de Melo Pereira, mas em vão, por ter sofrido uma forte resistência por parte dos portugueses, não tendo, de novo, podido deixar de lhes tomar uma atitude conciliatória em fazer as negociações através da mediação dos jesuítas¹⁵. Fideyoxi ainda permitiu que permanecessem em Nagasaki menos de dez padres jesuítas¹⁶, tendo assim acabado por revogar praticamente o artigo mais essencial contido no sobredito édito anti-cristão.

Em suma: falhou tão cedo a tentativa por parte de Fideyoxi de forma a que cumprisse a compra monopolizada das mercadorias embarcadas nos navios portugueses sem sofrer a intervenção dos missionários jesuítas. Fideyoxi foi obrigado a reconhecer a existência da Igreja Católica, existencia essa que seria minimamente necessária para a execução eficaz do trato português. Mais tarde Fideyoxi repetiu as perseguições contra a cristandade, mas, uma

¹⁵ *Lettera del Giappone degli anni 1591 et 1592*, Roma, 1595, pp.85-90. Jap.Sin.51, ff.334-342v. Ōta Masao [太田正雄], “Ruisu Furoisu Nihon shokan” [「ルイス・フロイス日本書翰」] in *Kinoshita Mokutarō Zenshū* [『木下杢太郎全集』], VI, Iwanami Shoten, 1950, pp.256-269. *Jūroku-shichi-seiki Iezusukai Nihon-hōkokushū* [『十六・七世紀イエズス会日本報告集』], coord. Matsuda Kiichi [松田毅一], primeiro período [第一期], I, Dōbōsha [同朋舎], 1987, pp.256-267. Takase Kōichirō, “Kirishitan-jidai no nippo-gaiko ni okeru Iezusukai senkyōshi” [「キリシタン時代の日ポ外交におけるイエズス会宣教師」] (in *Shigaku*, 70-1), pp.91-93. Takase Kōichirō, *Kirishitan-jidai no bōeki to gaikō* [『キリシタン時代の貿易と外交』], Yagi Shoten [八木書店], 2001, terceira parte, c.I.

¹⁶ Carta redigida pelo padre Valignano em Macau, datada a 9 de Novembro de 1594 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.12-II, f.222).

«Primeramente con la buelta de la nave de Japon que llego aqui en abril deste año 94 supimos que los nuestros al cabo de aver passado despues de mi partida de alla, diversos trabajos y peligros, les diera la divina providentia algun refrigerio con meter en el coraçon de Quambacudono y de su ministro y privado Terazauadono [寺沢殿] que es el gobernador de Nangasaqui que nos destruyo Nuestras casas e iglesias, hun grande temor, que por ser destruida nuestra Iglesia en presensia del Capitan y de los portugueses, no bolverian con su nave a Japon, y se perderia aquel comertio que era tan importante y provechoso, el qual temor fue tambien comun asi en los señores y grandes como en los mercaderes y mas pueblo de Japon, por lo qual reprehendian todos mucho y se quexavan de lo que avia hecho Quambacu y Terazauadono temienado que la ira de Quambacu se bolviessse contra el por aver sido el inventor & exequtor desta obra començo a tratar como podria alcanzar que se bolviessse de nuevo a hazer Iglesia en Nangasaqui y como hallo la materia dispuesta por estar Quambacu mui arrepentido de lo que tenia echo, aunque no dexo la nave de bolver a Japon dentro de hun año despues que fue destruida la Iglesia, todavia para Quambacu mas se asegurar dio luego licencia que los portugueses bolviessen a hazer su Iglesia y casas para los padres en el Lugar en que primero estavan, concediendo que en ellas pudiessen estar hasta diez padres para hazer sus ministerios con los portugueses, con tal que no entendiessen con los japoses y lo que aun fue mas quiso que fuesse un padre de los nuestros juntamente con el capitan a veerle, y a ambos hizo grandes muestras de amor y aunque en la verdad el es inimigo de Nuestra Santa lei y esta en la misma opinion que se no promulgue ni dilate en Japon, y todo esto hizo en nonbre de lo hazer por los portugueses para asegurar el trato de la nave todavia fue grandissima providentia de Nuestro Señor y grande quietacion para los padres y para toda la christandad.» (Jap.Sin.12-II, f.222)

vez que desejava a continuação e conservação do trato português, ele sempre tinha uma certa debilidade para com os jesuítas, a qual foi aproveitada até ao máximo por estes relativamente à missionação. Assim o facto de os poderes unificadores japoneses terem tomado uma medida conciliatória para a conservação do trato português e a Igreja Católica ter conseguido realizar a sua evangelização com o apoio do comércio constituía a base das relações diplomáticas que os dominadores nipónicos mantinham em relação ao mundo ibérico até aos primeiros anos do xogunato dos Tocugaua [徳川幕府] fundado em Yedo [江戸] no ano de 1603.

4. A Missionação Evangelizadora e a Força Militar

No Século Cristão do Japão tiveram lugar não poucas perseguições nomeadamente desde os anos de 20 do século XVII. Quase sempre que os dominadores nipónicos provocavam perseguições, uma parte dos missionários jesuítas manifestavam a respectiva opinião afirmando que a sua razão residia no facto de se ter suspeitado que na sua missionação evangelizadora se encontrasse encoberta a ambição da invasão territorial. Afigura-se-me bastante significativo ter sido apresentada a presente análise, juntamente com o facto de quase todas as relações escritas no período Yedo sobre os cristãos (Kirishitan) são unânimes em afirmar que a propagação da fé é o instrumento servil dos invasores europeus, neste caso, «Nanbanjin» [南蛮人], isto é, Bárbaros do Sul. Como já foi mencionado acima, no que diz respeito ao problema da missionação evangelizadora e a sua relação com a força militar, isto deve ser entendido e interpretado, sendo pressuposto o facto de ter sido estimulada a expansão ultramarina ibérica no período dos Descobrimentos, tendo-se unido as duas conquistas, isto é, a conquista militar e a conquista espiritual.

No Continente Americano e nas Ilhas Filipinas onde se concretizaram a conquista e a colonização, o problema da «Guerra Justa» foi deliberado seriamente no processo delas a partir do ponto de vista teológico e legal, juntamente com o assunto relativo ao tratamento dos respectivos nativos. Mas, por outro lado, no Japão, o qual não se tornou num alvo da colonização ibérica, a questão relativamente ao uso da força militar para o fim de uma eficaz missionação, segundo me parece, foi argumentada de uma maneira assaz fácil pelos missionários residentes no Japão. Escusado será dizer, não poucos missionários aderiam a uma opinião contrária ao uso da força militar de forma a cumprir a missionação. Tal argumentação, todavia, não foi tão seriamente aprofundada em relação ao pensamento cristão e à metodologia missionológica, mas o interesse principal dos argumentadores foi, antes disso, concentrado num aspecto mais prático do que teórico, onde se discute maiormente se o uso da força militar seria proveitoso e eficaz ou não em respectivas ocasiões. Isto, em outras palavras, significa o acto de tentarem fazer a avaliação do poder do dominador e perseguidor de então. Foi exactamente em torno da dita avaliação que teve lugar a divergência de opiniões de vez em

quando entre os argumentadores eclesiásticos.

Naquela altura os missionários europeus consideravam o Japão como um dos países mais civilizados no mundo gentio, o qual facto fez com que os mesmos adoptassem, nomeadamente no Japão, uma política missionológica de conquistar o seu povo e competir com ele na esfera cultural, mas, apesar disso, um bom número dos missionários residentes no Japão manifestavam a opinião em favor do uso da força militar aquando da sua missionação, o qual, segundo creio, constitui um facto bastante respeitado. Para conhecer o que os missionários pensavam no íntimo do coração relativamente à suposta colonização japonesa, tirando-lhes a máscara, parecer-me-ia mais desejável examinarmos quais argumentações e opiniões foram trocadas e travadas em relação à questão acima mencionada mesmo na esfera evangelizada do País do Sol Nascente que escapara de cair às mãos colonizadoras ibéricas.

O padre vice-provincial Gaspar Coelho da Companhia de Jesus no Japão, no ano de 1585, redigiu uma carta ao Superior da Companhia de Jesus nas Filipinas de maneira a pedir-lhe que mandasse a armada espanhola ao arquipélago japonês, tendo juntamente instalado os navios de guerra e as munições no porto de Nagasaki. O padre Coelho, face à promulgação do sobreredito édito anti-cristão, tentou reunir à sua volta os dáimios cristãos, ainda fazendo mais esforços temerários para resistir à opressão de Fideyoxi através de um reforço das Filipinas¹⁷. Quanto ao projecto militar a ser levado a cabo pela Companhia de Jesus um pouco antes e depois da promulgação do édito anti-cristão, nós teríamos a tendência de pensar erradamente que apenas o padre Coelho teve o atrevimento de recorrer às condutas imprudentes, tendo-se isolado do “bom concelho” dos seus colegas jesuítas. O Padre Visitador Valignano, tendo receado que se revelasse a realidade do caso a Fideyoxi e daí sobreviesse um grande desastre à Missão Católica no Japão, exerceu uma grande propaganda de maneira a fingir que o caso foi causado pelo acto completamente arbitrário por parte do padre Coelho. Isto, porém, é longe de ser verdadeiro e não podemos engolir tudo o que diz o Padre Visitador.

Vejam-se, por exemplo, as ordenações redigidas pelo próprio Padre Visitador para o Superior do Japão no mês de Junho de 1580, onde se ordena que se instalem as suficientes munições tanto em Nagasaki como em Moghi [茂木] e se fortifiquem ambos os portos¹⁸.

¹⁷ Okamoto Yoshitomo, “Tenshō-matsu ni okeru Yasokai no gunbi-mondai” [「天正末に於ける耶蘇会の軍備問題」] in Okamoto Yoshitomo, *Momoyama-jidai no kirisutokyō-bunka* [『桃山時代のキリスト教文化』], Tōyōdō [東洋堂], 1948. Takase Kōichirō, “Kirishitan-senkyōshi no gunji-keikaku” [「キリシタン宣教師の軍事計画」], jō [上] & chū [中] (in *Shigaku*, 42-3; 43-3). Takase Kōichirō, *Kirishitan-jidai no kenkyū*, *op. cit.*, primeira parte, c. III.

¹⁸ Jap.Sin.49, f.256, 256v.; 8-I, f.262.

Veja-se o «Regimiento para el Superior de Japon por el padre Visitador en el mes de junio del año de 1580»:

«Para el bien y conservacion de la cristiandad y de los padres importa mucho que el puerto de Nagaçaqui adonde comunmente van los navios de los portugueses sea bien fortificado y proveido de municiones, armas y artilleria y otras cosas necessarias y de la mesma manera importa que se tenga segura y concertada la fortaleza de Mungui [茂木] por ser el paso entre las tierras de Vomura [大村] y del Tacaco [高来], en las cuales tenemos la

Julgo que foi um acontecimento significativo na história do Século Cristão do Japão o padre vice-provincial e os seus seguidores terem tentado fortificar a cidade de Nagasaki e terem pretendido resistir militarmente ao poder de Fideyoxi logo após a promulgação do édito anti-cristão, mas, o padre Coelho não tomou nenhuma medida arbitrarias, tendo apenas obedecido fielmente às ditas ordenações do Padre Visitador. No dia 11 de Fevereiro de 1589 realizou-se em Tacacu [高来], perto de Ximabara [島原], uma Consulta chefiada pelo padre vice-provincial com a participação de outros seis padres jesuítas, nomeadamente, Gomes, Organtino, Fróis, Mora, Rebelo e Laguna, onde, de acordo com o inquérito do padre vice-provincial, todos os participantes, inclusive o padre Coelho próprio, exceptuando apenas Organtino, manifestam a opinião de enviar Mora às Ilhas Filipinas de maneira a pedir o envio dos reforços¹⁹.

fuerça de la cristiandad de aquellas partes y por eso conviene que tengan los superiores mucho cuidado y diligencia en que sean bien proveidos estos dos lugares, pues estan a nuestro cargo y importan tanto y por eso este primero año gastaran todo lo que fuere necessario para los fortificar de manera que esten fuertes para qualquier impetu de enemigos que los quisieren tomar y despues todos los años gastaran ciento y cincuenta ducados de los que pagan los navios de los portugueses para los ir siempre mas fortificando y proveyendo de artilleria y de las mas cosas necessarias

Y porque no se pueden los lugares ni gobernar ni conservar sin se hazer Justicia derecha especialmente con los japones que no tienen otro gobierno sino sus espadas con lo qual siquiera por este temor se apartan de no hazer tantos males encomiendo mucho a los superiores que hayan que los yaquinins [役人] de Nagaçaquí y Mungui (que son como sus capitanes o regidores) guarden las leyes que se les dieron en sus regimientos y administren Justicia derecha, y quando asi lo hizieren guardense de impedirlos y ir los a la mano, por usar de piedades, como es costumbre de los padres porque de otra manera se causarian muchas desinquietaciones y insultos en aquellos lugares y los moradores dellos perderian el respecto y la obediencia no solamente a los yaquinins pero a la mesma iglesia y se causarian otros muchos inconvenientes con el tiempo, y por eso dexen hazer Justicia a los yaquinins aunque sea algun tanto severa como fuere derecha y desta manera se conservara la obediencia y paz en aquellos lugares.

/(f.262v.) Asi mismo procuraran para tener a Nagaçaquí mas seguro y mas fuerte que esten ay los mas portugueses casados que se pudieren sustentar en aquella tierra, los quales aconteciendo aver cerco sera bueno meterlos en la fortaleza de dentro para que desta manera este mas fuerte y segura de todo peligro, y procuren de engrandecer y multiplicar de moradores y de gente aquel lugar haziendo que todos tengan sus armas conforme a sus qualidades y facultades para todo lo que aconteciera y quando el tiempo y la experiencia mostrasen que por muchos inconvenientes no conviene la Compañía tener estos lugares an con mucha diligencia y prudencia de examinar y consultar las razones por una parte y por otra y avisar a los superiores de la India o tomar con los que fueren sus consultores la resolucion que conviene conforme a las facultades y poderes que les fueren para eso concedidos.» (Jap.Sin.8-I, f.262, 262v.)

¹⁹ Jap.Sin.11-I, ff.60-62.

Veja-se a opinião do padre Pedro Gomes vista na Relação da Consulta realizada em Tacacu [高来] a 11 de Fevereiro de 1589:

Assim o padre Coelho intentou exercer as actividades militares com o apoio de alguns padres principais e é inteiramente errado afirmarem que o padre vice-provincial pretendeu concretizar o projecto de uma maneira arbitrária e isolada, e que todos os outros colegas se manifestaram contrários à sua empresa tão temerária. Segundo nos informa um padre jesuíta, antes disso, o padre vice-provincial foi aquele que foi convencido passivamente a aceitar o dito projecto. Quer dizer: o padre Rui Barreto, referindo-se mais tarde às circunstâncias existentes aquando da Consulta, escreve: Nesta Vice-Província há muitos padres espanhóis e alguns seguidores seus, os quais, numa Consulta realizada no ano anterior, persuadiram o padre vice-provincial Gaspar Coelho a enviar um dos seus colegas para Espanha «a pedir socorro a Felipe porque como os da consulta erão a mor parte castelhanos prevaleserão voces [uma palavra ilegível] mas este padre encontrando o padre visitador em Machao que tomou ysto muito mal como por veses o dise o fez tornar»²⁰. Assim poderíamos confirmar ter existido aqueles que concebiam tal pensamento bem activo e positivo relativamente ao uso da força militar para com o Japão, independentemente do que intentava e pensava o Padre Visitador.

Então seria inteiramente verdadeira a descrição acima citada do padre Barreto? Talvez o não fosse necessariamente, pois a questão relativa ao uso da força militar encontra-se estreitamente ligada às complicações originadas da consciência patriótica concebida em comum por um bom número de missionários provenientes de várias nações europeias. No interior da Companhia de Jesus no Japão composta por padres oriundos de vários países tais como Portugal, Espanha, Itália, etc., havia, de facto, não poucos casos onde se sentia não só antipatia mas também aversão, sentimento provavelmente provocado pela consciência patriótica. Isto poderia ser confirmado na divergência de opiniões, por exemplo, relativamente ao caso do projecto militar e podemos confirmar ter existido alguns padres de origem portuguesa e italiana caluniando e maldizendo as coisas dos seus colegas de proveniência espanhola, em especial, no que diz respeito à sobredita questão do projecto militar. Por exemplo, os padres jesuítas provenientes de Portugal (e de Itália), os quais se reconheciam obrigados a impedir que a influência de Espanha e ordens mendicantes de linha espanhola atingisse o País do Sol Nascente de maneira a que protegessem a esfera económica e missionológica tida como pertencente a si próprios, enviavam umas cartas a Roma, não só afirmando com ênfase terem possuído os espanhóis uma ambição territorial para com o Japão, mas também criticando terem intentado os seus colegas espanhóis uma conspiração com os

«Acerca do 2.º ponto lhe pareceo que não estando o padre visitador na China ou fosse morto, que fosse hum padre dos que o padre viceprovincial parecer a India a fallar com o padre provincial e visorrei e lhes de conta do estado em que Japão esta, e o padre Melchior de Moura que fosse a os Luções e fallasse sobre o socorro e se quisesem mandar gente que parecese poder ajudar ca que seria bom, e que de ahi pasase o padre avante pera fallar com Nosso Padre Geral e com Su Magestad do estado e necessidade em que Japão esta.» (Jap.Sin.11-I, f.60)

²⁰ Pós-escrito da carta redigida pelo padre Rui Barreto em Nagasaki, datada a 8 de Outubro de 1596 e dirigida ao Padre Assistente da Companhia de Jesus João Alvares (Jap.Sin.12-II, f.371).

frades mendicantes compatriotas e terem colaborado com os mesmos na implantação da influência espanhola. Encontra-se bastante limitado o número dos jesuítas que nos deixam as opiniões, quer positivas, quer negativas, relativamente ao projecto militar, pelo que me abstenho de falar de uma maneira decisiva, mas, poder-se-ia dizer que os jesuítas espanhóis eram, falando de um modo geral, mais activos e positivos relativamente à questão do uso da força militar de maneira a avançar uma missão eficaz e fácil. Tal tendência geral, porém, não nos levaria a concluir facilmente que os missionários de outras proveniências assumiam uma atitude mais moderada. Não existia, de facto, outra alternativa senão a de se depender do exército espanhol com a base em Manila de maneira a que invadissem o território japonês. Como já vimos acima, os jesuítas mesmo provenientes de Portugal (e de Itália) não se mostraram fundamentalmente contrários ao projecto militar a ser levado a cabo, mas sentiram, segundo creio, uma certa resistência e relutância para com o facto de que a suposta introdução do exército militar deveria ser concretizada pelo poder espanhol já existente nas Filipinas.

5. A Política Missionológica adoptada pela Companhia de Jesus para com o Japão

Quanto à política missionológica adoptada pela Companhia de Jesus para com o Japão, os pesquisadores, segundo me parece, são quase unânimes em afirmar que o Padre Visitador Valignano estabeleceu a essência da mesma quando visitava pela primeira vez o Japão no ano de 1579, tendo adicionado algumas pequenas alterações mais tarde de acordo com a devida necessidade. Há, porém, várias dúvidas acerca disso, pelo que me cabe tratar resumidamente o assunto. O Padre Visitador Valignano veio ao Japão por três vezes, sendo a primeira visitação mais importante, pois planeou nesta ocasião a política básica nomeadamente destinada à evangelização japonesa. Chama-se «acomodatio» («acomodação») aquela política adoptada pelo Padre Visitador, onde se exigia que os missionários europeus se adaptassem tanto quanto possível aos usos e costumes exteriores japoneses de maneira a evitar a prevista fricção mental e psicológica, e se visava, futuramente, doutrinar e formarem religiosos japoneses. O conceito principal por parte de Valignano em relação à política missionológica da «acomodação» para com o Japão pode ser simbolizado tanto na obra intitulada *Advertimentos e Avisos acerca dos Costumes e Catangues de Jappão* por ele elaborada no ano de 1581²¹ como no conteúdo inovador da educação doutrinal de maneira a criar os sacerdotes japoneses nos seminários e colégios, os quais o Padre Visitador fundou decisivamente em Adzuchi,

²¹ A. Valignano, *Il Cerimoniale per i Missionari del Giappone*, Giuseppe Schütte ed., Roma, 1946. Yazawa Toshihiko [矢沢利彦] & Tsutsui Suna [筒井砂] tras, *Nihon Iezusukaishi reihō shishin* [『日本イエズス会士礼法指針』], Kirishitan-bunka Kenkyūkai [キリシタン文化研究会], 1970.

Arima [有馬], Nagasaki, etc. durante a primeira visita.

Ao que Valignano dá particular ênfase de forma repetida nesta obra é a necessidade de os jesuítas manterem o prestígio secular e a autoridade religiosa. Segundo observa Valignano, o mostrar «mais gravitydade do que convem, fica em desonra, e o querer fazer menos, por respeyto de usar humildade, abate e faz cair em desprezo juntamente a pessoa e a rrelygião». Ele, depois de informar os seus colegas que «assim emtre os bonzos como emtre os seculares, há diversos graos de estados e dignidades, os quoaes todos com summa diligencia procurão de guardar, tratamdo cada hum de tal maneira qual he propria e conveniente a seu estado, de maneira que não fassa nem mais nem menos do que convem a sua pessoa e dignidade», afirma que «pera os Padres e Irmãos saberem como hão de proceder, hé necessario a primeira cousa: detreminar e saber bem qual hé sua dignidade e em que altura se podem pôr, pera que correspomdão com as dignidades e homrras que os bomzos tem, pera poderem tratar com elles e com os mais senhores japões».

Isso não teria sido possível sem reconhecer a consciência hierárquica arraigada na sociedade japonesa de então. Parecia, por isso, conveniente ao Padre Visitador «porem-se» vários graus sacerdotais, «na mesma altura em que os bomzos da seyta dos genxus [禪宗]», julgando que a mesma seita «entre todas he tida em Japão por principal» e «tem mais commonicação com toda a sorte de gemte de Japão». Assim, os jesuítas no Japão estariam divididos em algumas hierarquias, a saber: o «Superior de Japão», que «terà a altura do princípal Nãojenjino ycho [南禪寺之院長]»; os «Superiores Universsais», que «terão a altura dos simco Choros de Gosan [五山之長老]»; os «Padres todos [comuns?]», que «estarão na altura que tem comumente os Choros [長老]»; os «Irmãos antiguos», que «estarão na altura dos Xusas [首座], que são bomzos formados que esperão de ser Choros [長老]»; os «Irmãos novicios», que «estão no amdar dos Zosus [藏主], que são os que esperão de ser bomzos formados», e finalmente os «Dogicos [同宿]», assistentes catequistas não pertencentes à Companhia de Jesus, que «terão o luguar que tem nas ditas varelas os Jixas [侍者]».

Trata-se, é claro, de uma estratégica missionológica deliberadamente elaborada pelo Padre Visitador de maneira a infiltrar-se a fé cristã na sociedade tradicional japonesa utilizando a sua hierarquia. Tal política missionológica, porém, teria criado de uma forma irresistível uma tendência de respeitarem o pundonor, o prestígio, a honra, a autoridade, etc., sendo inevitável também causar uma atitude religiosa contrária à corrente cristã de “pobreza honesta”. Isto exerceria uma influência bastante grave de forma directa ou indirecta sobre a missionação a ser levada a cabo posteriormente. Por exemplo, a conduta frequentemente observada entre as altas esferas da Companhia de Jesus no Japão de terem oferecido presentes e banquetes luxuosos aos poderosos japoneses de maneira a adquirirem benefícios e de terem-se comportado com uma certa arrogância de forma a manter o seu prestígio formaria, é certo, um factor provocando as dúvidas em relação ao espírito religioso dos jesuítas.

Relativamente a tal atitude fundamental da Companhia de Jesus no Japão, para além das críticas provenientes dos frades mendicantes, surgiram várias suspeitas graves a partir do

interior da própria Companhia. Cabe-me citar apenas dois exemplos. Primeiramente o padre Carlo Spinola escreve o seguinte na carta redigida em Nagasaki, datada a 25 de Março de 1615 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus:

«A 6.^a e ultima cousa he o que se gasta em presentes, assi os que faz o padre provincial, como os que dão os outros superiores, e padres particulares, os quaes nada luzem, e não servem se não de ternos por ricos, e nos somos bem pobres, e pois se vee que com darmos tanto até agora não nos podemos conservar em Japam, creio que he vontade de Deos que mudemos modo, e procedamos como religiosos pobres, e nesta occasião nos escusemos com dizer que não temos que dar; e pois que conforme a o costume de Japam não se pode deixar de dar alguma cousa, agora he tempo de nos por em bom foro, e fazer o que fazem os mesmos Bonzos graves, e que tem boas rendas em Japam, os quaes a os Tonos, e a Tencadono [天下殿] não offerecem mais que huma resma de papel, e hum abano, e os religiosos de Filippinas humas candeas de cera branca, dizendo que são pobres; e me parece que he grande erro cuidarmos que a christandade se ha de fazer, e conservar com presentes, mas antes com guardarmos nossa pobreza, e instituto, e confiarmos em Deos, que os Apostolos assi fazião, e até que em Japam não percamos o nome de ricos, pouco avemos de medrar, porque tenho visto por esperiencia, que muytos se fazem christãos, e se chegam a nos, e nos chamão a suas terras, pera que os socorramos em suas necessidades, lhes emprestemos prata, e negociemos seda, e peças de laya nova quando vem a nao; isto bem entende o padre provincial, mas como esta posto em costume, he cousa dificultosa de se reformar, e não ha outro remedio que determinar V. P. que daqui por diante se tirem os presentes que ate agora se costumarão, e somente se dem os que se costumão em Japam, e quando muyto a o Tencadono, e a os Tonos principaes se dee algum brinco, vinho, e doce feito chara Europa, porque em começando desta maneira, tudo sera facil, e Deos Nosso Senhor concorrera com nossa pobreza. O mesmo digo dos banquetes, os quaes quando dão em suas cazas os Bonzos, ainda que a grandes senhores, não lhes dão mais que ervinhas, e outras cousas desta laya que elles professão de comer, sem entrar carne, nem peixe, e nos saimos com muytas iguarias feitas a o nosso modo, e a o seu, com o que pouca reputação alcansamos, antes cuidão que aquillo he o nosso ordinario, como me lembra que em Napoles no meu tempo se espalhou fama que comiamos demasiadamente bem, por causa dos que convidamos no refeitório nas festas principaes; e não ha duvida que huma cousa moderada agrada a Deos, e aos homens, e não he nossa honra dizerse, como dezião alguns, que vinhão a nossas cazas pera fartarse de vaca, e comer iguarias de Europa, e convidavão pera isso outros seus amigos; porem nunca vi que disso se siguisse fruto pera a christandade, nem honra de Deos, se não dizerem que levamos boa vida, e comemos de ordinario melhor que calquer Tono, como eu tenho ouvido por vezes.»²²

E o padre Manuel Dias escreve o seguinte na carta redigida em Macau, datada a 5 de Novembro de 1615 e dirigida ao Padre Assistente da Companhia de Jesus Antonio Mascarenhas:

²² Jap.Sin.36, f.168v.

«O Padre Passio hia por Nangazaqui acompanhado de varios moços, que chamão comonos [小者], doiucos [同宿] e tonobaras [殿原], que respondem entre nos a lacayos, pagens e escudeiros, porque levavão suas catanas [刀] e vaquisaxis [脇差] id est espadas e adagas, e vinhão ca os Portuguezes contar com pouca satisfação sua e muita vergonha nossa, andava o Provincial da Companhia em Nangazaqui acompanhado de japoens acatanados e outras cousas semelhantes, em que eu posto nunca falei, senão na consulta alguma vez que se tratava dellas, todavia como o Padre as fazia e consentia para bem (como cuidava) de Japão havia lhe não tinha eu amor, pois me não contentava dellas.»²³

Temos confirmado que a política missionológica adoptada pelo Padre Visitador exerceu uma influência de tal forma danosa sobre as actividades evangelizadoras e conheceu várias críticas severas por parte dos seus colegas. Assim poderíamos comentar que a política em questão deveria falhar e desfazer-se mais cedo ou mais tarde.

Quanto à questão da formação dos religiosos japoneses, o Padre Geral da Companhia de Jesus cedeu uma instrução ao Padre Visitador já no ano de 1578, tendo ordenado que fizesse os japoneses entrarem na Companhia e os formassem de forma a se ordenarem como sacerdotes²⁴, pelo que Valignano decidiu instalar organismos educacionais para os crentes japoneses tais como o colégio, o seminário, o noviciado, etc., tendo repellido a objecção fervorosa do padre Francisco Cabral, Superior do Japão de então. Todavia, para além da opinião já famosa do padre Cabral, havia várias opiniões contra o projecto de Valignano desde cedo. Por exemplo, o padre Lorenzo Mexia, já no ano de 1579, comenta o seguinte: Mesmo que haja, é certo, «muchos millares de cristianos», eles apenas «se baptizaron, mas no se quantos tienen la fee». A maioria deles tornam-se cristãos «con respecto a la nave de Portugueses que aqui viene cada año, porque pretenden la ganancia, que della les puede venir». O Padre Visitador «esta mui assentado en hazer algunos seminarios de niños Japones, para que criandose en virtud e doctrina a nuestro modo, puedan ser por tiempo buenos cristianos y ordenarse y ser curas», o qual, segundo ele pensa, constitui um projecto problámatico e

²³ Jap.Sin.16-II, f.231v. Tem o texto idêntico a carta redigida pelo padre Dias em Macau, datada a 5 de Dezembro de 1615 e dirigida ao Padre Assistente da Companhia de Jesus (Jap.Sin.16-II, f.249v.).

²⁴ Ordenação redigida pelo Padre Geral da Companhia de Jesus Everard Mercurian, datada a 4 de Dezembro de 1578 e dirigida ao Padre Visitador Valignano (Jap.Sin.3, f.2v.).

«Quanto al trato de los nuestros de Iapon me ocurre decir a V.R. que aunque en las respuestas de la congregacion se determino que del todo se quitasse, todavia vistas las razones que el Padre Francisco Cabral escribe en su carta a V. R. me parece que pueda suspender la execucion hasta otro aviso nuestro que daremos luego que ternemos informacion de V. R. acerca de lo que iuzga dever se hazer en el dicho negocio, y porque de las informaciones que de alla venieron, entendemos que los Iapones tienen qualidades accomodadas a nuestro instituto y a la necesidad de aquella tierra, podra V. R. comunicar con la moderacion que le pareciere facultad al Viceprovincial de Iapon para los poder recibir en la Compañia procurando que sean bien criados en el Noviciado para que despues puedan servir para la conversion de aquella gentilidad.» (Jap.Sin.3, f.2v.)

inquietante²⁵. Mais tarde no ano de 1584 o padre Mexia escreve de novo: Os irmãos japoneses têm dois corações diferentes no interior e no exterior. Se permitimos facilmente a entrada dos mesmos na Companhia, deverá isso ser causa de futuros males²⁶.

Tendo sido levada à prática a educação doutrinal nos seminários e colégios, a questão relativa à formação dos sacerdotes japoneses, face ao seu resultado aí concretizado, passou a chamar uma atenção cada vez maior entre os jesuítas. O Padre Visitador Valignano, tendo aderido à sua opinião a favor da formação dos religiosos japoneses, originou a resignação do

²⁵ Carta redigida pelo padre Lorenzo Mexia em Cuchinotçu, datada a 14 de Dezembro de 1579 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.8-I, ff.248v., 249).

«Quanto a la cristiandad, como alla no se scrive sino lo bueno, pensava yo con nosotros que era una primitiva yglesia, y que podria venire acaa obispo, y aver yglesias cathedrales, y que se podrian ordenar muchos naturales, y cosas semejantes, mas ahora veo claramente que nada desto es possible daqui a buenos años, porque los cristianos, como tienen tan malo natural, y tan mala educacion de niños, no se muda luego que son cristianos, sino mui devagar, y por eso son mui frios en la fee, y muchos la dexan bolviendo a adorar sus pagodas y idolos, y contanse muchos millares de cristianos, porque se bautizaron, mas no se quantos tienen la fee, tambien viene esto de no aver tantos padres y hermanos, que custen para cultivar y conservar esta nueva viña. Por donde parece, que no se deve de dilatar la cristiandad daqui hasta algunos años, en quanto no se fundan bien los cristianos, que son hechos, sino si se pidiese con mucha instancia y con buen spiritu, porque los que hasta ahora son hechos, siempre fue con respecto a la nave de Portugueses que aqui viene cada año, porque pretenden la ganancia, que della les puede venir, y ansi algunos señores y tonos piden la fee para sus tierras a trueco de la curofune, que ansi llaman la nave pensando que esto es contrato y modo de mercaderia, que hazemos con ellos, y no es pequeño trabajo el que tienen los padres con todos estos cristianos y gentiles en les enbiar pieças de seda y otras cosas de precio, a los unos porque no buelvan atras, y a los otros para que sean nuestros amigos.

El padre Visitador esta mui assentado en hazer algunos seminarios de niños Japones, para que criandose en virtud e doctrina a nuestro modo, puedan ser por tiempo buenos cristianos y ordenarse y ser curas, lo que puede ser, si uviere quien favorezca este buen intento, porque caa los Reies y señores son mui pobres, y antes ellos de nos esperan, que nos dellos. Los niños son ingeniosos y de buenna indole, y tomara facilmente los que se les enseñaren, los quales en grandes son tan malos, como tengo dicho porque en pequeños no los castigan sus padres y madres, aunque merescan castigo, porque tienen por crueldad dar en los inocentes, y hazerlos llorar, por lo qual los niños hazen algun mal, tomanlos a parte como a viejos ancianos y ansi los amonestan que no hagan mas aquello, y pecados ha que no solo no los castigan las madres, mas mandanle que los hagan, y esta creo que es la principal causa desta / (f.249) gente universalmente ser tan mala, tan sanguinaria, y tan abominable.» (Jap.Sin.8-I, ff.248v., 249)

²⁶ Carta redigida pelo padre Mexia em Macau, datada a 8 de Dezembro de 1584 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.9-II, f.322v.)

«5.º porque los Japones hermanos son ya mas que los hermanos de Europa, y como son naturalmente fingidos y dissimulados, porque lo tienen por honra, id est tener un hombre dos corações uno para fuera, y otro para dentro que no lo sepa nadie, y lo contrario tienen por boberia, puedese temer que adelante brote y nasca alguna mala semilla, sino se recibiere con mucha election y probation.» (Jap.Sin.9-II, f.322v.)

Padre Cabral do cargo de Superior do Japão. Valignano, por fim, acabaria por conceber uma outra opinião mais negativa relativamente às qualidades essenciais dos japoneses, como se vê no relatório acerca da segunda visitaçãõ do Japão escrito no ano de 1592, apenas dez anos depois de ter acabado com a primeira visitaçãõ. Valignano, porém, ainda não abandonava a esperança de que os seminaristas japoneses se tornariam bons sacerdotes após terem recebido uma boa educaçãõ e treinamento²⁷, mas não poucos jesuítas continuavam a fazer oposiçãõ à ordenaçãõ dos mesmos.

Por exemplo, o padre Celso Confalonieri manifesta uma opiniãõ repetidamente contra a ordenaçãõ dos japoneses, afirmando que lhes faltam boas qualidades para serem sacerdotes nos anos de 1594 e 1595²⁸. O padre Francesco Pasio, o qual tornar-se-ia num bom sucessor do Padre Visitador Valignano e assumiria o cargo de administrador geral da Igreja Cristã no Japão, apoiando a avaliaçãõ mostrada por Valignano para com os japoneses no relatório no ano de 1592, comenta que os irmãos japoneses, cuja fé é fraca, são arrogantes por natureza, lhes faltando o espírito de abnegaçãõ para fazer o que é bom e difícil, e também lhes faltando o sentimento de obedecer aos seus superiores, e que é extremamente grande a probabilidade de quebrar, em especial, o voto da castidade, assim tendo-se mostrado fortemente contrário à ordenaçãõ dos mesmos²⁹. O padre Pasio comenta no ano seguinte, em 1597, que todos os

²⁷ A. Valignano, *Adiciones*, J. L. Álvarez-Taladriz ed., pp.573-581. Cf. Ide Katsumi [井手勝美], “Higashi-Indo junsatsushi A. Variniãno no Nihonjin-kan” [「東インド巡察師 A・ヴァリニアーノの日本人観」] in *Kirishitan kenkyū* [『キリシタン研究』], XII, pp.403-413.

²⁸ Carta redigida pelo padre Celso Confalonieri em Amacusa, datada a 10 de Fevereiro de 1594 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.12-I, f.175). Carta redigida pelo padre Confalonieri no Japão, datada a 16 de Outubro de 1596 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.13-I, f.1). Hubert Cieslik, “The training of a Japanese clergy in the seventeenth century” in *Studies in Japanese Culture*, Sophia University, 1963, p.73.

²⁹ Carta redigida pelo padre Francesco Pasio em Nagasaki, datada a 30 de Janeiro de 1596 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.12-II, f.351).

«E cominciando del voler il Padre Valignano ordinar li fratelli Giaponi, dico che non si puo porre in dubio se se ordenavano sacerdoti li Giaponi o no, perche certo he che hanno di essere ordinati cosi li nostri fratelli che serano atti e sufficienti per il sacerdotio como gli alumni del seminario che havrano le medesime parti per il sacerdotio, ma non terano vocatione ne parti per la Compagnia, ma tutto il dubio sta se he gia tempo per cominciare, e il modo che in questo si ha de guardare cosi con li nostril fratelli como con li alumni del seminario: e acerca questo primero ponto a tutti li Padri del Giapone pare che he presto per cominciare, e del medesimo parere sono io ancora, le raggioni che a questo ci movono si posono coligere del Sumario che il Padre Valignano ha mandato a V. P. che erata del governo di Giapone dove describe la natura costumi e inclinazioni delli fratelli Giaponi, e molto piu ciaramente della aditione octava al decimosesto e decimoseptimo capitolo del dito Sumario le quali aditioni mandò il Padre Viceprovincial a V. P. per il Padre Egidio della Mata che fu di qua mandato per Procuratore, e per la informatione che il Padre Valignano da in questo Sumario e nella dita aditione, si vede la puoca dispositione che al presente tengono li fratelli Giaponi per il sacerdotio, e li inconvenienti che con molta ragione si posono temere che

padres residentes no Japão se opuseram à ideia defendida por Valignano de enviar sucessivamente os irmãos japoneses ao colégio de Macau de maneira a fazê-los estudar e a ordená-los, por fim, como sacerdotes³⁰. Já é conhecida desde antigamente entre os pesquisadores japoneses a carta do padre João Rodrigues Tçuzu, o melhor conhecedor das coisas japonesas, afirmando que há-de haver a máxima prudência e cuidado até no que se concerne à entrada dos japoneses e dizendo adicionalmente que a opinião acima mencionada é uma conclusão tirada através da sua experiência de ter vivido prolongadamente no Japão e ter catequizado e educado os seminaristas japoneses³¹.

nascano esendo gente cosi tenera e fiaca nelle fede, naturalmente attiva con la propria volonta puoco mortificata, puoco sogeti alli Padri in cui Compagnia stanno, puoco zelosi delle anime, e con le altre qualita che il Padre Valignano in questi doi luochi scrive, e se adesso danno tanto travaglio e sono cosi difficili di governare quanto maggiore si puo temere che habiano de dare dipoi de fatti sacerdoti.» (Jap.Sin.12-II, f.351)

³⁰ Carta redigida pelo padre Pasio em Nagasaki, datada a 3 de Março de 1597 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.13-I, f.59).

«Doi ponti principali scrissi l'anno pasato a V. P. per obbligo del mio officio, il p.º acerca di promuovere li fratelli Giaponi al sacerdotio, perche il Padre Alessandro Valignano Visitatore quando tornò alla India lasciò scritto al Padre Viceprovinciale che mandasse dodici fratelli Giaponi al novo Colegio di Amacao accio yvi studiassero doi anni Casi di conscientia, tenessero el 5.º anno del Novitiato e dipoi tornassero a Giapone fatti sacerdoti e alla tornata di questi 12, fossero altri tanti in suo loco, e dipoi altri per il medesimo ordine. Questo ordine e determinatione del Padre Valignano discontentò molto a tutti li Padri del Giapone perche giudicano non essere ancora capaci li fratelli Giaponi del sacerdotio cossi di pressa como il Padre Visitatore pensa, anzi lo tengono per cosa molto pericolosa. Le raggioni per le quali li Padri si moveno a essere di questa opinione, quasi tutte se reducono aquello che il Padri Visitatore dice nella additione octava al capitolo 16 e 17 del Sumario di Giapone dove describe la natura e costumi di questi fratelli, e perche V. P. tiene questa additione perche il Padre Egidio della Mata che di quà fu per Procuratore la levò seco con le altre che scusato referirla, e di quello che il Padre Visitatore dice in questa additione si vede como no sono capaci del sacerdotio cosi de pressa, ma che he necessario pigliar prima molto bona experientia di chiascheduno, la quale come dice il Padre Visitatore in questa medesima additione, non si può pigliare mescere estano nel Novitiato ne nel Collegio, perche non si discopre alhora quello che hanno nel cuore ne si cognosca bene la loro natureça, ma quando stanno in Compagnia di un Padre intendendo nella conversione, o nella cultivatione della cristianita alhora descopreno quello che sono, e de questo consta che non si puo procedere con motra pressa nelli ordini seno dipoi de buona experientia, [...]» (Jap.Sin.13-I, f.59)

³¹ Carta redigida pelo padre Rodrigues Tçuzu em Nagasaki, datada a 28 de Fevereiro de 1598 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.13-I, ff.132, 132v.). Cf. Doi Tadao [土井忠生], “Joan Rodrigues Tsūji no Nihon shokan” [「ジョアン・ロドリゲス通事の日本書翰」] in *Nippo Kōtsū* [『日葡交通』], vol. II, Tōyōdō [東洋堂], 1943, pp.159-165.

«Anssi mismo por algun conocimiento que tiengo desta nacion, por me criar entre ellos desde niño propongo a Vuestra P. que me parece no convenir a nuestra Compañia admittir a ella muchos hermanos Japones sin exacto examen y escoja, y con mucha consideracion, porque no tienen aquellas partes que los de Europa assi naturales, como en la efficacia de adquirir la virtud, y naturalmente es gente flaca y inconstante, allende que es ainda poco

Por outro lado, o padre jesuíta Luís Cerqueira, vindo ao Japão no ano de 1598 na qualidade do segundo bispo residindo no Japão, tendo sentido a necessidade de criar e formar os padres japoneses e tendo aprovado os resultados obtidos nas anteriores actividades educacionais levadas a cabo pela Companhia de Jesus no Japão, ordenou pela primeira vez dois japoneses como padres no ano de 1601. Existem, escusado será dizer, alguns padres jesuítas que não poupavam palavras em elogiarem uma certa contribuição prestada pelos padres japoneses novamente ordenados, cujo típico exemplo é a opinião bem favorável do padre Diogo de Mesquita³². Infelizmente, porém, tal opinião do padre Mesquita não representa de modo

fundada en las cosas de nuestra santa fee, y rezien convertida que no sabe de raiz las cosas de la religion ni las entiende, y no sera bueno para nuestra Compañía cargarse de mucha gente imperfecta y quise vaya de la religion facilmente quando es instigada de la tentacion si que ella los pueda constreñer a nadie, por no tener braço secular de que se pueda ayudar contra los tales, como ya algunos lo han hecho andandose por tierras de Infieles sin podelles castigar como apostatas de la religion, y lo que es peor, que algunos destes han dexado la fee, como fue, Lino, Simon, Vomi Joan, Antonio, que no solamente la dexaron, mas sembravan erros, aun que les no deron credito, e algunos estan casados con hijos en tierras de Infieles, que es muy gran descredito de nuestra Compañía, que los que predicavan la lei de dios nuestro Señor esten desta manera, y muchos años hay que tengo este concepto, y me pare que realmente no se tiene perfecta cognition desta nacion en lo que toca a las cosas de nuestra Compañía y con aver pasante de cento y tantos Japones en ella ninguno se de partes para gobierno ni penetrar mucho las cosas de la religion, ni gran zelo de las animas, ni mas poco mucho disposicion para las ordenes sacras por ahora; y es para arecelar, que despues queran ellos tener el gobierno, siendo los de Europa pocos, y ellos muchos y imperfectos; y recibidos quasi sin vocacion, porque la maior parte dellos se cria en los seminarios de niños y allí persuadidos de los que los crian, piden la Compañía sin saber lo que hazen ni la importancia del estado que escogen, y contecio que una vez se recibieron treze juntos para el noviciado y de otra vez otros tantos juntos, otra vez seis, y se ve que entre ellos no ay hombre ninguno spiritual ni dato a la oracion, y ay mucho engano en ellos; porque naturalmente son muy modestos exteriormente y quietos en tal que captivan a los nuestros, y no pueden ser conocidos ni penetrados, es verdad que tambien en lo que toca a las pasiones no son tan vehementes como los de Europa como tambien ni tan eficazes para la virtud, ni en esto entendo murmurar desta nacion, ni deshazer en ella mas solo dizir lo que siento ser bueno a nuestra Compañía, porque me crie entre ellos e en el seminario de Miaco y de Arima les he lido latin por algunos años.» (Jap.Sin.13-I, f.132v.)

³² Carta redigida pelo padre Diogo de Mesquita em Nagasaki, datada a 3 de Novembro de 1607 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.14-II, f.285). Diego Pacheco, “Los cuatro legados de los Daimyos de Kyushu despues de regresar a Japón” in *Boletín de la Asociación Española de Orientalistas*, Año 9, Madrid, 1973, pp.39, 40. Cf. Sakuma Tadashi [佐久間正] tra. “Nihon ni kaetta shōnen-shisetsu” [「日本に帰った少年使節」] (in *Nagasaki Dansō* [『長崎談叢』], 56), pp.23, 24.

«A igreja que temos neste Nangasaqi, e Collegio he a mayor, e a de mais concurso, que ha em todo Japão, porque con ser tam capaz he tanto o auditorio, que ate o pateo se enche algumas veses, mas os pregadores, que sobem a este pulpito são ordinariamente Jrmãos Japoes, e o fazem com tanto fruto, e edeficação, como puderão fazer nossos Padres. Pois sendo assi que estes Jrmãos dão tam boa conta de si como os de Europa, e sabem latim mui sufficientemente, e pregão huns ha 10, outros ha 15 annos, tendo o mesmo, e mais de religião com satisfação

nenhum a maioria das vozes dos jesuítas residentes no Japão. Para além disso, por pouca sorte, naquela altura, tiveram lugar repetidamente vários casos escandalosos relativos aos jesuítas japoneses, por motivo dos quais uns fugiram à Companhia de Jesus e outros foram expulsos dela. O padre Giovanni Battista Porro, referindo-se ao caso de o irmão japonês Fucansai Fabião [不干齋ファビアン] e vários outros irmãos japoneses terem provocado alguns casos escandalosos e terem saído da Companhia de Jesus, afirma com tanta ênfase que é muito melhor obrigar os japoneses a servirem aos padres, mantendo-os na qualidade de «dojucos» sem lhes permitir a entrada, dizendo adicionalmente que se eles cometerem erros e provocarem escândalos, isso não constituiria de modo nenhum a infâmia para a Companhia de Jesus, diferentemente do caso dos irmãos, já verdadeiros membros da Companhia de Jesus³³.

de todos, não sei porque se lhes a de negar, o que se não nega a outros de Europa, e da Índia, que nos e elles mesmos Japoes vem que não tem tantas partes, nem dão tam bom exemplo, nem servem tanto a Companhia. Temos aqui alguns Irmãos destas partes que digo, e ja perto dos 40 annos, e não sei que lhes esperamos, tendolhe dito por outra parte que os ande promover, mas parece que sera quando ja não possão trabalhar com a velhice, e quando elles ja da cansados de esperar diguão que não podem estudar, nem deseção esta dignidade como poucos dias ha dise hum ao Padre Viceprovincial o qual certefico a V. P. que mais merece ser sacerdote, do que eu nunca o mereci, e ja ha muitos annos que pudera ter ajudado esta cristandade com o menisterio dos sacramentos de que tanto carece. Nem sei como não lhe acudimos com o pasto celestial ordenando os que são pera isso pois ja temos experiencia de quam bem o fazem os dous Padres Japoes, que os annos passados se ordenarão id est Padre Luis, e Padre Bastião, e com quanta edeficação, e fruto sem se lhes achar ate gora macula na vida, andando sempre sos por diversas partes convertendo os gentios, e cultivando a cristandade: porque esta ventajem nos levão, que alem da administração dos sacramentos preguão, e passão livremente por as terras dos gentios, e adversarios sem serem conhecidos. Veja V. P. quanto fruto farão semelhantes obreiros, e quanto tempo de ajudar com mais fruto a cristandade tem perdido o Irmão Martinho, e outros que aqui estão, que não se ve mais sua dilação, que de lhes fazer perder o credito pera com o povo cuidando que se lhes dilata tanto por a pouca satisfação, que delles ha, pois com os outros de Europa, e filhos da Índia não se guarda o mesmo. Nem que rezão ha pera o Irmão Martinho, que esta ja velho, e com seos casos acabados, averlhe de dilatar aguora mais hum anno depois das ordens de Diacono, as de sacerdote querendo guardar os intresticios. Nem da o Padre Viceprovincial mais rezão, que pera estimarem mais as ordens, porque he certo não ser por defeito de virtude, nem sciencia, o que a mim he mais notorio que a ninguem, pois os trato, e conheço a todos intrinsicamente. E que não seja falta de virtude bem se mostra, pois com tantas dilações, ainda que como homens o devem sentir, como os de Europa tambem sentem, todavia não o fazem senão com muita modestia, e com quem entendem ter lhes amor, do que certo me edefico não aver japão, que ate guora por este respeito viesse a quebrar senão foi Chinjiua Miguel [千々石ミゲル], que se a tempo lhe acodissem com sua lição de casos não viera ao que aguora tem vindo com tanto detrimento da cristandade de Vomura.» (Jap.Sin.14-II, f.285.)

³³ Carta redigida pelo padre Giovanni Battista Porro no Japão, datada a 20 de Setembro de 1611 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.15-I, ff.38v., 39).

«V. P. ja estara emformado da poca honra que fazem estes Irmãos Jappões a Companhia in oculis nem soo de toda a cristandade, senão de tantos frades: saindo tantos, e muitas vezes com tão ruim nome. A cousa de Fabião ja he velha; esta elle ainda apostata como primeiro em huma cidade que se chama Facata, com a sua meretrix a

O padre Mesquita, o qual tinha grande confiança em relação aos religiosos japoneses, critica a maneira de tratar dos japoneses da Companhia de Jesus, afirmando que a razão porque alguns irmãos japoneses fugiram à Companhia de Jesus reside no facto de que apesar de lhes terem sido dadas esperanças no que diz respeito aos japoneses poderem-se tornar em sacerdotes, tendo-lhes feito aprenderem o latim, etc, a Companhia, por fim, não escolheu nem promoveu os japoneses como sacerdotes³⁴. O mesmo padre Mesquita adverte numa outra carta, dizendo que há-de haver muito cuidado em não dar uma impressão aos japoneses de os jesuítas empregarem apenas colegas de proveniência europeia e de praticarem alguns actos discriminatórios para com os colegas japoneses³⁵. Recordemo-nos das seguintes palavras

ilhaga, diante de todos os cristãos (porque em Facata ha cristandade numerosa, e casa grande nossa) João de Torres que tinha 10 annos de religião, ja desde o tempo de B. P. Torres: Cofan Lião: Cusa Andre; Simeão Lião e outros: e crea V. P. (o dizem os mesmos Jappões) que não tem ainda estes cabedal pera serem religiosos: e delles poco a poco se vão promovendo muitos ao sacerdotio. Universalmente os Padres sentem muito isto, e rezam /(f.39) a Deos que seja esta promoção pera sua gloria. Certo que melhor, ou pollo menos que bene, servem aos padres em catechisar os gentios, em pregar, em ajudar os cristãos os dojucus, como os Irmãos, com huma vantagem id est que se lhes acontece algum desastre e falta, não caie em discredito da Companhia como dos Irmãos, e depois que estou em Jappão nestes 7 annos não ha acontecido dojucus fazerem tais erros como alguns Irmãos id est ainda antes de fugirem da Companhia estarem amancebados com bicunins [比丘尼], como foi de Fabião: todos nos folgamos com ver que o Padre Visitador não vai continuando o novitiado: e os que entra na Companhia dos Irmãos quando entrão o tomão mais a punta de honra, que outro: e depois achandose apertados com votos e regras, recalitrant em quanto são dojucus não estão tão apertados, e podem levar a carga melhor, de pregar, catechizar, e continuar.» (Jap.Sin.15-I, ff.38v.,39)

³⁴ Carta redigida pelo padre Mesquita em Nagasaki, datada a 24 de Março de 1611 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.36, ff.13, 13v.).

«Alguns Irmãos Japões se despedirão que ja anos ha que têmão principios. E causas para isso por verem que os fizerão trabalhar muitos annos no latim e depois não lhes acodirão porque para necessidade não deu lugar por onde se relaxarão na virtude. Ben sera advirtir ca que se faça mais caso de /(f.13v.) os instruir na virtude que não fazerlhes gastar sinco e seis annos em latim com animo de que serão padres, não avendo por a mayor parte tal intento nos superiores, mais que pera pregarem o qual como he na lingoa Japoa bastalhe 2 annos para poder referir sen tropeçar muito alguma autoridade em latim, pois a pregaçam a estudão ordinariamente por livros e pontos que ja estão traduzidos de latin em lingoa Japoa. E todos os pregadores que tivemos os annos passados com que nos foi bem forão aqueles que não sabião latin. E aynda agora ha alguns que levão vantagem na virtude aos latinos, pelo que parece que se podia escuzar tanto trabalho e gasto no latin com tanta gente pois lhes basta o estudo de livros em sua lingoa, porque sabendo correr por os nossos as vezes se aproveitão mal do que achão escrito, [...]» (Jap.Sin.36, ff.13,13v.)

³⁵ Carta redigida pelo padre Mesquita em Nagasaki, datada a 10 de Março de 1613 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.36, f.21v.).

«Somente o que agora se me offerece he que como esta provincia de Japão id est a cultivação da cristandade conversão dos gentios etc. depende tanto dos Irmãos e padres Japões, he necessario que V. P. sempre encomende

impressionantes ditas pelo ex-irmão Fabião na sua obra intitulada *Fa-Daiusu* [『破提字子』] (“Deus Destruído”): ‘Devido à sua arrogância, os Baterens de Nanban não consideram os japoneses como humanos.’ («Cõman naru mono domo naruga yuyeni nifonjin voba fito tomo vomouazu») [高慢ナル者共ナルガ故ニ日本人ヲバ人トモ思ハズ]; ‘Nós sentimo-nos terrivelmente aborrecidos e chateados ao saber do seguinte princípio de operação: “A partir de agora não permitamos aos japoneses o serem Baterens”. Vós poderíeis imaginar qual sorte de sentimento teríamos ao saber que o nosso objectivo real nunca pode ser realizado.’ («Kiõcõua nifonjin uo baterenni nasu coto nacare tono ghi nite, mina vomoxirocumo zonjezu. Cono fonyni canõ becarazuto yũua, nanito xitaru cocoromochi nite aranto yũ cotoua, go suiriõ arubexi») [向後ハ日本人ヲ伴天連ニナスコト勿レトノ義ニテ, 皆面白クモ存ゼズ。此本意ニ叶フベカラズト云ハ, 何トシタル心持ニテアラント云フ事ハ, 御推量アルベシ]), etc.³⁶.

O apelo acima apresentado fervorosamente levado a cabo pelo padre Mesquita, todavia, significaria, pelo contrário, que tal opinião como foi concebido pelo padre Mesquita apenas constituiria uma opinião minoritária. Por exemplo, o padre Porro escreve: «delles poco a poco se vão promovendo muitos ao sacerdotio. Universalmente os Padres sentem muito isto, e rezam a Deos que seja esta promoção pera sua gloria»³⁷. O Padre Provincial Valentim

ca aos superiores o cuidado de terem estes subditos benevolos, não lhes faltando com aquilo que a natureza muitas vezes sem ser sentida de frauda aos estrangeiros por acudir aos nossos naturaes, não intervendo as vezes tantas partes e rezões nestes como nos outros.» (Jap.Sin.36, f.21v.)

³⁶ Ebisawa Arimichi [海老沢有道], Hubert Cieslik [フーベルト・チースリク], Doi Tadao & Ôtsuka Mitsunobu [大塚光信], *Kirishitan-sho & Haiya-sho* [『キリシタン書 排耶書』], Iwanami Shoten, 1970, pp.443, 444.

[Nota adicional do tradutor] Veja-se o trecho em questão da obra da autoria de Fabian Fucan *Ha Daiusu*, ou seja, *Deus Destroyed* através da tradução inglesa elaborada por George Elison:

«*You ask*: I suppose there do exist some courtesies between the Southern Barbarians and the Japanese within the temple.

And I answer: This also you can guess from the story I have related above. Because of their arrogance they do not even consider the Japanese to be human. And the Japanese, considering this outrageous, in their turn do not tender courtesy with sincerity.

And moreover, so that the Bateren and Iruman residing in Japan might continue to receive their financial support from the Emperor of South Barbary, we Japanese could not possibly see our true desire satisfied. “Henceforth, do not let Japanese become Bateren!” – we all felt terribly nonplussed by this principle of operation. But you can guess what kind of a feeling it is to know that one’s real purpose can never be attained. And the reason is that the Southern Barbarians feel that in their designs against Japan they will find natives partial, after all, to the interests of their native land. You can be sure of that!» (George Elison, *Deus Destroyed: The Image of Christianity in Early Modern Japan*, Harvard University Press, 1973, pp.286-287)

³⁷ Carta redigida pelo padre Porro no Japão, datada a 20 de Setembro de 1611 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.15-1, ff.38v.,39).

Carvalho informa a sede da Companhia de Jesus que a maioria dos padres e irmãos japoneses, no que se concerne à competência de efectuar os serviços sagrados, «não passam de mediocridade»³⁸.

Pois bem. Que decisão, relativamente à sobredita questão, anunciou a sede da Companhia de Jesus, o qual tinha reunido inúmeras informações acerca da avaliação dos membros japoneses? O Padre Geral da Companhia de Jesus na ordenação enviada no ano de 1611 admoesta os seus colegas europeus residentes no Japão a serem bastante cautelosos no que diz respeito a ordenarem facilmente os japoneses, dizendo: «Lembramos a V. R. com ocasião da queda de Fabião, e do que a experiencia vai mostrando nos outros dojucus que julgamos ser necessario promover com muita consideração ao sacerdocio os Japões pera que nos não vejamos em algum trabalho com elles, e a V. R. encarregamos muito faça o mesmo com esses Irmãos não promovendo senão aquelles de que tiver tomada boa experiencia, e de cuja virtude se possa assegurar»³⁹. No ano seguinte de 1612, o Padre Geral da Companhia de Jesus deu-lhes uma outra instrução também de índole negativa, dizendo que, considerando importante o facto de se terem repetido saídas e expulsões dos irmãos japoneses, têm de efectuar uma grande vigia sobre eles, não têm de favorecer os japoneses em demasia, têm de fazê-los trabalharem na qualidade de fiéis catequistas, ou seja, dojucos, e que basta fornecê-los o mínimo conhecimento do latim, etc, apenas de acordo com a necessidade de cumprirem a dita tarefa⁴⁰. E, por fim, o Padre Geral da Companhia de Jesus chegou

³⁸ Carta redigida pelo padre Valentim Carvalho em Macau, datada a 30 de Novembro de 1614 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.16-II, f.106).

«Acerca dos Padres e Irmãos Japões he difficultoso julgar se sam colericos ou não. A verdade he que os Japões são ordinariamente colericos, porem sabem refrear a colera, especialmente os nossos Irmãos quando estam diante de pessoas, das quaes dependem, como são os superiores, e geralmente falando são melanconicos. No talento para os ministerios da Companhia não passam de mediocridade, e os mais delles ficam infra mediocritatem.» (Jap.Sin.16-II, f.106)

³⁹ Ordenação redigida pelo Padre Geral da Companhia de Jesus Claudio Aquaviva, datada a 1 de Janeiro de 1611 e dirigida ao Padre Vice-Provincial do Japão (Jap.Sin.3, f.76v.).

⁴⁰ Ordenação redigida pelo Padre Geral da Companhia de Jesus Aquaviva, datada a 28 de Março de 1612 e dirigida ao Padre Vice-Provincial do Japão (Jap.Sin.3, ff.76v-77v.).

«Nesta diremos o que pertence a criação desses dojucus e Irmãos Japões / (f.77) primeiramente não julgamos expediente que no seminario se recebam mininos mas que os que entrão nelle seja ordinariamente dos que tem dado alguma pouca de sua bondade e talento nas residencias, ou missões acompanhando os Padres.

Item que se não gaste tanto tempo em lhes ensinar latim, mas bastará que saibão somente quanto lhes he necessrio pera entenderem os livros ecclesiasticos, e se servirem delles, finalmente se procure de os fazer bons catequistas, não os metendo noutros estudos que a este fim não são necessarias com o que se conservarão mais humildes, e servirão melhor, e se forrarão despezas: assi mesmo que o seminario se reduza a menor numero acomodado as necessidades e aperto da provincia. E por ora não parecia que se devera escusar ao menos a pintoria e charamelas.

praticamente a fechar a porta para a ordenação dos japoneses, dando-lhes a seguinte ordenação: «soposto que esses Japões servem mais em dojucus que sendo sacerdotes, ou entrando na Companhia ainda que desto os não excluimos totalmente, he bem ir lhes tirando a ocasião da tentação que he aprender tanto latim [...]» e dizendo adicionalmente: «he necessario apertar muito a mão, e ir muito atento assi em receber na Companhia como no ordenar sacerdotes os Japões, e assi senão fosse nalgum caso muito raro em que podera o Provincial ouvidos os consultores fazer o que in domino julgasse, avisando nos logo do que se tem feito de certo nos pareceo ordenar que não receba os taes nem os admitta a ordens sem depois de o consultar ahi nos mandar informação, e esperar nossa reposta»⁴¹.

Dos que acabado o tempo do seminario tiverem provado bem nas christandades se poderão somente receber alguns, mas serão mui raros, e escolhidos. Vemos ser parecer de muitos que deviamos reservar a nos esta licença, não nos pareceo fazelo, mas metemola ao Visitador, ou quando o não aver ao Padre Provincial que sopomos sera sempre pessoa de quem poderemos confiar semelhantes cousas, e que o fara com toda a exacção, e eleição que convem, não se deixando levar de intercessões. Por ora nos parece que convem apertar muito mais a mão polo muito numero que ha de Irmãos Japões, e a experiencia ir mostrando que não saem, como esperavamos, e assi não convir receber senão raros, e mui bem provados primeiro, e feitas todas as mais diligencias que a Vs. Rs. la parecerão que nos vistas as informações que de la vem; não fechamos a porta pola cousa ser odiosa a essa nação, de que todavia com o tempo podera esperar algum bem.» (Jap.Sin.3, ff.76v.,77)

⁴¹ Ordenação redigida pelo Padre Geral da Companhia de Jesus Aquaviva, datada a 1 de Fevereiro de 1615 e dirigida ao Padre Provincial do Japão (Jap.Sin.3, f.77v.).

«Não pretendemos com acima dito que V. R. aja de afroxar em fazer conservar a disciplina, antes o exortamos a continuar, sabendo a necessidade que ha nessa Provincia de reformar, e acomodar muitas larguezas que nella se forão introduzindo, como de estarem nossas casas tam devaças a pessoas de fora, o que nos dizem he ocasionado a quebras de momento o andarem esses Irmãos Japões ordinariamente sós, e ainda alguns Padres de que não ha tanta segurança; o receberem e escreverem cartas sem as mostrarem ao superior e semelhantes que V. R. como esta ao pee da obra, terá visto.

Pollo passado lembramos que soposto que esses Japões servem mais em dojucus que sendo sacerdotes, ou entrando na Companhia ainda que desto os não excluimos totalmente, he bem ir lhes tirando a ocasião da tentação que he aprender tanto latim no que tambem se escusarão gastos, o mesmo tornamos de novo lembrar na forma e moderação que ja dissemos.

Dizem nos que essas residencies no campo entre gente pobre são de poco proveito e de muito risco a esses Irmãos Japões, e ainda aos outros, V. R. consultara este negocio, e o remediara conforme ao que se julgar ser necessario.

Visto que o Padre Valignano escreveu depois de tam larga experiencia e o que mostrarão depois estes annos; he necessario apertar muito a mão, e ir muito atento assi em receber na Companhia como no ordenar sacerdotes os Japões, e assi senão fosse nalgum caso muito raro em que podera o Provincial ouvidos os consultores fazer o que in domino julgasse, avisando nos logo do que se tem feito de certo nos pareceo ordenar que não receba os taes nem os admitta a ordens sem depois de o consultar ahi nos mandar informação, e esperar nossa reposta.

/ (f.78) Os dojucus consequenter não he bem que aprendão latim, pois isto lhe servira de fomenfer tentações, e

Assim temos confirmado que a linha directiva de acções bem negativa já adoptada anteriormente em relação à entrada e à ordenação dos japoneses ficou ainda mais negativa e a porta para isso se tornou praticamente fechada. Trata-se do conceito de, apesar de reconhecerem a necessidade da colaboração e ajuda dos japoneses nas suas actividades eclesiásticas, não lhes oferecer a posição igual dos europeus e mantê-los na qualidade de dojucos de maneira a fazê-los servir aos seus superiores europeus, bastando dar-lhes um certo conhecimento de maneira a cumprir a referida tarefa. Uma vez que o Padre Geral da Companhia de Jesus tinha determinado tal linha directiva de acções, se tornou necessariamente impossível desenvolverem e avançarem a formação dos sacerdotes japoneses, mas, já naquela altura, tendo sido promulgado o édito anti-cristão para todo o território japonês pelo xogunato de Yedo no ano de 1614, surgiram vários impedimentos e complicações relativamente às suas actividades eclesiásticas em geral.

Curiosamente o facto de se terem tornado mais complicadas e apertadas as circunstâncias exteriores em redor da Igreja Cristã (Kirishitan), segundo me parece, formaria, ao contrário da decisão acima mencionada por parte da sede da Companhia de Jesus, um dos factores de terem surgido vários sacerdotes japoneses também depois de ter sido promulgado o édito anti-cristão no ano de 1614. A razão do sucedido provavelmente residiria no facto de se tornar mais necessário contarem com a ajuda dos sacerdotes nativos – japoneses – do que anteriormente, já no período de todos os missionários – nomeadamente europeus – enfrentarem as perseguições e andarem escondidos e fugidos. Como consequência disso, não poucos japoneses, os quais ainda não tinham cumprido satisfatoriamente, nos seminários, colégios, etc, os estudos indispensáveis para serem padres qualificados, passaram a ordenar-se como padres, sendo enviados para os locais onde se concretizavam as actividades evangelizadoras⁴². Tal formação dos padres japoneses, formação essa que foi levada a cabo devido a uma certa urgência e foi regularizada com menos rigor do que é devido, escusado será dizer, não tem nada a ver com a realização da ideia do «acomodatio», política missionológica advogada pelo Padre Visitador Valignano. A discussão acerca dos prós e os contras relativamente à questão da formação dos sacerdotes japoneses, a qual tinha se originado do debate polémico travado entre o Padre Visitador Valignano e o Superior do Japão Cabral, estava a chegar a uma conclusão: a opinião negativa parecia assumir a posição dominante, mas, a Companhia de Jesus no Japão, apesar das ordenações negativas dadas pela

assi desejamos que V. R. de tam bem nisto boa ordem, e faça que o não aprendão, senão fosse com alguém que pera serviço das missas ou pera se servir dalgumas autoridades no pregar no cathequismo se julgasse necessario ensinarlhe somente o que pera este effeito lhe basta, posto que nos dizem que com os livros que de novo se estampão se podera suprir este effeito. E assi neste particular nos remetemos a V. R. que vera com esses padres o que mais convem.» (Jap.Sin.3, ff.77v.,78)

⁴² Takase Kōichirō, “Makao no Korejio” (O Colégio em Macau) [「マカオのコレジオ」], 7 (in *Shigaku*, 69-3, 69-4). Takase Kōichirō, *Kirishitan-jidai no bunka to shosō* [「キリシタン時代の文化と諸相」], Yagi Shoten [八木書店], 2001, segunda parte, c.X.

sede da Companhia de Jesus, foi obrigada a continuar a ordenar os japoneses como padres, segundo me parece, de uma maneira assaz fácil, devido à necessidade incontornável de atenderem à política rigorosamente opressiva novamente adoptada pelas autoridades do xogunato de Yedo.

6. O Xogunato de Yedo e a Cristandade Japonesa

Poder-se-ia afirmar que a política adoptada pelo xogunato de Yedo para com a Igreja Cristã (Kirishitan) foi basicamente aquilo que foi sucedido da política adoptada por Toyotomi Fideyoxi. Trata-se da política formada sobre o conceito de equilibrarem-se e fazerem compatíveis os dois princípios básicos, isto é, a vontade de proibir a missionação cristã e o desejo de promover o trato português.

Logo depois de Tocugaua Iyeyasu [徳川家康] ter conquistado a «Tenca» [天下], ou seja, ter ganhado o poder universal do Japão, teve lugar um conflito entre os comerciantes japoneses, relativamente à compra das mercadorias transportadas pelo navio português vindo a Nagasaki no ano de 1602. O conflito em questão parece ter mostrado uma aparência de uma disputa travada entre os comerciantes cristãos relacionados com a Companhia de Jesus e os mercadores não cristãos intimamente ligados com o Governador de Nagasaki Terasaua Firotaça [寺沢広高]. Segundo nos informam umas cartas inéditas, Iyeyasu, tendo recebido «con mucho amor, y charicias» o padre João Rodrigues Tçuzu e o cristão Murayama Tōan [村山当安] que vinham «darle el parabien del año Nuevo» de 1603, encomendou que os cinco cristãos representados por Murayama Tōan governassem a cidade de Nagasaki, tendo excluído Terasaua que «avia muchos años corria con el gobierno de Nagasagi», e mandou ainda «que en las cosas graves tomassen parecer con el P. Juan Rodriguez procurador general de la Compañia de Japon y con el padre Viceprovincial y assi se ha corrido hasta agora»⁴³. O padre Rodrigues Tçuzu visitou Iyeyasu por duas vezes no ano de 1604 e Iyeyasu ofereceu-lhe a importância de 350 cruzados⁴⁴, tendo emprestado a de 5 000 ducados respectivamente à Companhia de Jesus e à cidade de Nagasaki nos fins do mesmo ano ou nos inícios do ano de

⁴³ Carta redigida pelo padre Pasio em Nagasaki, datada a 3 de Outubro de 1603 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.14-I, f.129v.). Carta redigida pelo padre Antonio Francisco de Critana em Nagasaki, datada a 14 de Março de 1605 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.35, f.145v.).

⁴⁴ Carta redigida pelo padre Pasio em Nagasaki, datada a 6 de Novembro de 1604 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (British Library, Add. Mss. 9860, f.89. De acordo com a fotografia conservada no Tōkyō Daigaku Shiryō Hensanjo [東京大学史料編纂所]).

1605⁴⁵. Para conhecer a realidade das relações mantidas então entre Ieyasu e a Companhia de Jesus, o facto acima apresentado não deve ser pouco respeitado. Temos confirmado seguramente que, mesmo depois de Ieyasu ter conquistado a «Tenca», se mantinha não alterada de modo nenhum a realidade como tinha continuado desde anteriormente de ser possível cumprirem o trato português de uma forma eficaz só através da mediação e colaboração por parte dos missionários jesuítas.

São o trato português realizado no ano de 1602 e a sua transição ocorrendo nos seguintes um ou dois anos que exerceram uma influência directa sobre a instituição do «Itowappu seido» [糸割符制度], regime esse que se assemelha ao da «pancada» no qual é vendida e comprada por inteiro a seda crua pelos respectivos representantes de ambas as partes. É muito duvidoso e problemático, segundo creio, discutir a significação histórica do «Itowappu», não só se baseando no conceito de a realidade posterior do dito regime ter-se mantido igual e não ter conhecido nenhuma alteração exactamente a partir da sua instituição, mas também ignorando a realidade acima mencionada do trato português nos inícios do século XVII e os delicados relacionamentos existentes entre o xogunato e a Igreja Cristã no Japão. Julgo errada uma opinião quase aceite de a instituição do «Itowappu» ter exercido uma força dramaticamente danificadora sobre o trato português no qual os jesuítas participavam profundamente, e poder-se-ia afirmar que ainda se mantinha não só poderosa a administração de Nagasaki levada a cabo pelos jesuítas, mas também excessiva a sua interferência no comércio aí realizado, pelo menos, nos primeiros anos depois de Ieyasu ter conquistado a «Tenca».

Tais circunstâncias foram causadas pela atitude acima mencionada que Ieyasu tomava, mas, o factor mais decisivo foi o advento do padre João Rodrigues Tçuzu (intérprete). Ele residiu em Nagasaki na qualidade de procurador, isto é, padre encarregado nos negócios financeiros da Companhia de Jesus no Japão. Não só devido à posição que assumia, mas também ao seu maravilhoso talento relativo às negociações políticas, o padre Rodrigues meteu-se nas coisas mundiais profundamente em demasia⁴⁶. Como consequência de o Padre

⁴⁵ Carta redigida pelo padre Mesquita em Nagasaki, datada a 9 de Março de 1605 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.36, f.3v.). Carta redigida pelo padre Mesquita em Nagasaki, datada a 10 de Março de 1605 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.36, f.6).

⁴⁶ Doi Tadao, *Kirishitan-gogaku no kenkyū* [『吉利支丹語学の研究』], Saiseido [三省堂], 1971, pp.202-213. Michael Cooper, *Rodrigues the Interpreter*, New York, 1974, c.X. Em vez de enumerar os factos concretos comprovando a presente observação, convem-nos citar a seguinte avaliação acerca do melhor conhecedor das coisas japonesas vista no “Catalogo das informações comuas dos Padres e Irmãos de Japão em Novembro do anno de 1614”

«P. Juan Rodriguez el interprete profeso año 1601 fue niño a Japon año de 1577 y alla entro. Mediocres letras. La major lengua de Japon y sabe muy bien las cosas de la tierra, habil, solícito, de buen juicio. Tuvo grande entrada con Taicosama y con este Emperador Xongun y con todos los señores de Japon de modo que a su sombra y con su diligencia se conservaron los padres en Japon mucho tiempo.

Provincial Pasio ter-lhe prestado a ajuda e apoio nas suas actividades seculares, tornou-se enorme a influência exercida pelos jesuítas no que se concerne à administração da cidade de Nagasaki e ao trato português. Isso, escusado será dizer, todavia, tornou-se num problema grave e polémico, tendo sido realizada a Consulta pelos padres de maneira a resolvê-lo. O Bispo do Japão Cerqueira e o padre Mesquita, ambos os quais tiveram a posição contra a presente situação, afirmaram que deviam devolver todos os negócios mundiais ao senhor universal do Japão, ou seja, a Iyeyasu, mas, tanto o Padre Provincial Pasio como o padre Rodrigues manifestaram-se vigorosamente contrários a tal opinião de índole criticante, pelo que não se pôde, por fim, chegar à conclusão, não se podendo deixar de pedir ao Padre Visitador Valignano, o qual residia então em Macau, para pronunciar a sentença⁴⁷.

Juntamente com as deliberações acima apresentadas, chegam a nós numerosas cartas escritas pelos padres Cerqueira, Mesquita, Organtino, Critana, Costa, etc., todos os quais pedem à sede da Companhia de Jesus para providenciar o devido despacho, informando-lhe o sucedido. Por exemplo, o padre Gnechi Soldo Organtino não se atreve a escrever: «Paremi nel Signore che V. P. dovrebbe ordinare e comandare rigorosamente che da qui avanti non solo li Nostri non se intermettessero in ninguna cosa pertinente alli negocii temporali di questa Cita, ma ne di niuno altro luogo e terra di questo Giappone: perche (accio V. P. intenda piu chiaramente quanto importante cosa sia questa) si puo dire che tutti li travagli che la Compagnia ha patito da molti anni per qua in Giappone quasi tutti sono nati per causa dell'administratione di questo Nangasaqi»⁴⁸. O Bispo do Japão Cerqueira, mesmo que concebesse basicamente a mesma opinião, não foi qualificado, segundo me parece, para manifestar a opinião recta, porque ele efectuava o fornecimento dos fundos do seu bispado «por via do nosso procurador», aproveitando a prata «dirigida ao outro nosso Procurador de Macao, o qual a empregava e tornava a mandar a Japão»⁴⁹. Talvez por causa do que tenho

Erro en entremeterse mucho al fin en cosas seculares y en el gobierno de Nangasaqui y mercancías por ser procurador de la provincia, tomo con esto alguna mas libertad y cobro muchos enemigos fuera de casa un Toan y Safioye aunque creo que iniustamente le perseguieron y hizieron salir de Japon.

Para entender las cosas de Japon y China creo que ninguno major que el es zeloso grandemente de la conversion sino huviera tenido los encuentros pasados con algun escandalo talento tiene para superior y promover aquella conversion.» (Jap.Sin.25, f.107c.)

⁴⁷ Carta redigida pelo padre Mesquita em Nagasaki, datada a 9 de Março de 1605 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.36, f.4v.). Carta redigida pelo padre Mesquita em Nagasaki, datada a 21 de Março de 1605 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.36, f.8).

⁴⁸ Carta redigida pelo padre Organtino em Nagasaki, datada a 28 de Março de 1607 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.14-II, f.278v.).

⁴⁹ Carta redigida pelo padre Francisco Vieira no Japão, datada a 19 de Setembro de 1618 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.17, f.154). Valentim Carvalho, *Apologia e resposta a hum tratado feito pello Padre S. Pedro da ordem de S. Francisco que se intitula recopilção das causas por que o Emperador de Japão desterrou de seus reynos todos os padres*, núm.95, Biblioteca Nazionale Centrale Vittorio Emanuele II,

mencionado acima, o padre Cerqueira, depois de escrever: «Pode se com verdade afirmar que quasi todos os trabalhos, e enfadamentos que estes annos atraz tivemos em Jappão, e ainda agora nos não faltão se occasionarão, deste como governo, que na verdade não se pode chamar governo», menciona ainda logo a seguir: A nossa cristandade depende em tudo, «depois de Deus», do «Senhor da Tenca». Por conseguinte, «emquanto Deus Nosso Senhor nos não mostra outro caminho iulgo in Domino que não convem a Companhia nem ao serviço de Deus lançarse fora disto». O nosso bispo chega a concluir que se deve prestar esforços de maneira a fazer com que o seu acto comercial pareça que é feito por ser pedido e desejado por outrem, e o mesmo não pareça que é efectuado por preferirem e desejarem⁵⁰. Não se pode deixar de comentar que se trata do uso de palavras extremamente ambíguo e astucioso.

O facto de os missionários jesuítas terem exercido uma influência tão poderosa pode ser confirmado pela carta inédita do padre Nicolau da Costa, o qual escreve: «se queixou a outros padres e a mim o escrivão de Armação dizendo que [...] aos Portugueses não deixavão ser senhores do seu. E isto não era huma vez, nem duas, mas todos os annos que a nao vinha a Japão, e com capa de que era bem para a cristandade (como se Cristo Nosso Senhor tivera mandado a seus Apostolos convertesse o mundo por esta via). Fazião isto, e se metião em repartições de seda para tal e tal Tono e para seus amigos e devotos»⁵¹. Tal situação acabou por ter enorme repercussão na camada dominante da cidade de Nagasaki. O regedor de Nagasaki Murayama Tōan, o qual tinha sido amigo íntimo da Companhia de Jesus, separou-se dela, tendo-se aproximado gradualmente das ordens mendicantes de linha espanhola⁵². Neste caso, existiria, segundo me parece, no coração interior de Murayama Tōan, o qual acabou por ficar ligado com as ordens mendicantes (e com a maioria dos clérigos seculares japoneses), o tramar de tentarem fazer do porto de Nagasaki uma base naval dos navios espanhóis, tendo repellido e excluído a influência evocativa da nação portuguesa intimamente ligada com a Companhia de Jesus. Foi provocada uma dúvida de a Companhia de Jesus ter tomado partido por Suyetçugu Feizō [末次平蔵], o qual tinha relacionamento estreito com o trato português, quando ele disputou com Murayama Tōan. Mesmo que a Companhia de Jesus negue a

Fondo Gesuitico, 1469. Takase Kōichirō tra. *Iezusukai to Nihon* [『イエズス会と日本』], 2, Iwanami Shoten, 1993, pp.513, 514.

⁵⁰ Carta redigida pelo padre Luís Cerqueira em Nagasaki, datada a 1 de Março de 1607 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.21-I, ff.137, 137v.).

⁵¹ Carta redigida pelo padre Nicolau da Costa no Japão, datada a 26 de Fevereiro de 1612 e dirigida ao Padre Assistente da Companhia de Jesus (Jap.Sin.15-I, f.118v.).

⁵² J. L. Álvarez-Taladriz, “Fuentes Europeas sobre Murayama Toan (1562-1619)”, I, II, III (in *Tenri Daigaku Gakuhō* [『天理大学学報』], 51; *Kōbe Gaidai Ronsō* [『神戸外大論叢』], 17-1, 17-2, 17-3, 18-2). Sakuma Tadashi tra., “Murayama Tōan (1562-1619) ni kansuru Yōroppa no shiryō” [『村山当安(1562-1619)に関するヨーロッパの史料』], I, II, III (in *Nihon Rekishi* [『日本歴史』], 235, 245, 256). Carta redigida pelo padre Jerónimo Rodrigues em Nagasaki, datada a 26 de Março de 1617 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.17, f.76).

suspeita⁵³, ela ainda não se encontra, segundo creio, esclarecida. Murayama Tōan ficou vencido nesta disputa e foi executado, tendo perdido, por fim, a sua influência.

Eis aqui um outro exemplo evidenciando o poder comercial dos jesuítas em Nagasaki. Trata-se da colaboração prestada pelos jesuítas – mais nomeadamente pelo padre procurador João Rodrigues Tçuzu – de maneira a que os japoneses pudessem fazer investimento no trato realizado entre Macau e Nagasaki. Não se sabe com certeza desde quando foi iniciado o acto comercial de os jesuítas enviarem a prata dos japoneses a Macau e comprarem as mercadorias encomendadas pelos clientes japoneses através da utilização da rota eclesiástica, ou seja, mediante a cooperação bem mantida entre o padre procurador residente em Nagasaki e o seu colega do mesmo cargo residente em Macau, mas é certo que tal acto comercial já tinha sido realizado nos anos de 70 do século XVI⁵⁴. A razão porque foi adoptada tal forma comercial tão estranha reside no facto de a cidade de Macau ter proibido rigorosamente que a prata pertencente aos comerciantes japoneses fosse trazida para cá e investida aí⁵⁵. Os comerciantes japoneses, através do envio dos barcos autorizados pelo xogun chamados «Xuinxen» [朱印船] (Shuinsen) a vários portos espalhados no Sudeste Asiático, já tinham começado a efectuar o seu trato através do investimento directo, a qual forma comercial não foi permitida, como já tenho mencionado, no que diz respeito ao trato macaense e fez, por conseguinte, com que os comerciantes japoneses, de maneira a que pudessem obter os produtos no mercado cantonês e transportá-los ao Japão via Macau, ficassem com a escolha mais conveniente de contarem com os jesuítas, os quais, para além de possuírem vários privilégios como sacerdotes e

⁵³ J. L. Álvarez-Taladriz, “Fuentes Europeas sobre Murayama Toan (1562-1619)”, I (in *Tenri Daigaku Gakuhō*, 51, pp.98-107. Sakuma Tadashi tra., “Murayama Tōan (1562-1619) ni kansuru Yōroppa no shiryō”, I (in *Nihon Rekishi*, 235), pp85-93.

⁵⁴ A. Valignano, *Adiciones*, J. L. Álvarez-Taladriz, ed., p.541. Cf. Okamoto Yoshitomo, *Jūroku-seiki nichī-ō-kōtsū-shi no kenkyū*, p.683.

⁵⁵ Carta redigida pelo padre Fernão Martins em Macau, datada a 23 de Janeiro de 1592 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.11-II, f.268).

«Este pueblo haze su contracto con el capitan de Japon, y una de las condiciones deles, que de Japon no traiga dineros de Japones de alla, por la perdida que con esto recibe, porque quanto mas dineros aqua se trahen de los japones pera emplear, tanto menos provecho reciben los que van a Japon con su hazienda, porque allan menos quien se la compre, y como ha esta prohibicion sub graves penas, no pueden los japones pasar aqua su dinero con temor de lo perder, por lo qual los nuestros compadeciendose de algunos, o por le /(f.268v.) quereren hazer esta amistad por la obliguacion que le tiene, toman sus dineros y embianlos aqua con el nuestro al padre procurador pera lo emplear todo junto o por si o por otro y se lo tornar a embiar, en lo qual se hazen dos cosas de poco provecho y edeficacion. La una es que veniendo este dinero con el nuestro, haze parecer a todos que es maior el caudal que tiene Japon de lo que es, y quando maior les parece, tanto peor les parece el trato que tenemos. La segunda cosa es que supuesta la prohibicion ya dicha, escandalizanse mucho los hombres de nos, por contra ella con tanto dano deste pueblo venir de Japon por nuestra via dinero de japones pera se emplear aqui.» (Jap.Sin.11-II, f.268, 268v.)

gozarem da sua própria rede comercial, eram dotados de maravilhoso talento mundial.

Quanto às mercadorias no trato, por assim dizer, à consignação, podem-se enumerar principalmente aquelas tais como o «oro» (Jap.Sin.11-I, f.140), as «peças de seda»; o «almiscar»; as «mezinhas» (*Apologia*, núm. 80), o «ambre» (Jap.Sin.16-II, f.231), etc.⁵⁶, sendo raramente incluída aqui a seda crua, a qual, por ter importância crucial para a cidade de Macau, já tinha sido começado a ser exportada a partir dos anos de 70 do século XVI⁵⁷ através de uma sorte de organismo à semelhança de companhia chamada «Armação» e cujo trato ultrapassando os limites determinados pela «Armação» foi rigorosamente proibido. Tal tipo de trato à consignação foi permitido também aos irmãos japoneses, os quais poderiam pensar na conveniência comercial por amor dos seus pais e parentes⁵⁸, o qual facto faz-me presumir que os mesmos pais e parentes fá-los-iam entrar na Companhia de Jesus de forma a que pudessem fazê-los cumprir tais actividades de índole comercial.

Assim o montante investido no trato macaense pelos japoneses mediante os jesuítas, segundo nos informa uma carta inédita, ascendia anualmente a 30 000 a 40 000 taeis, tendo chegado de ano para ano a 70 000 taeis⁵⁹, montante enorme que se equivaleria a 5 a 6% ou a 15 ou 16% da soma total do trato português com os japoneses. Para além da participação no trato à consignação entre Macau e Nagasaki, os jesuítas, segundo parece, actuaram como intermediários do trato, até enviando o dinheiro pertencente aos seculares japoneses a Portugal⁶⁰. Isso, escusado será dizer, provocou vários prejuízos e abateu a honra aos jesuítas. Tal conduta de mediação comercial desagradou a alguns colegas da Companhia de Jesus, para além de ser naturalíssimo os comerciantes portugueses em Macau terem-na colocado como

⁵⁶ Carta redigida pelo padre Valignano em Macau, datada a 22 de Setembro de 1589 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.11-I, f.140). Carta redigida pelo padre Dias em Macau, datada a 5 de Novembro de 1615 e dirigida ao Padre Assistente da Companhia de Jesus (Jap.Sin.16-II, f.231). O mesmo texto tem a carta redigida pelo padre Dias em Macau, datada a 5 de Dezembro de 1615 e dirigida ao Padre Assistente da Companhia de Jesus (Jap.Sin.16-II, f.249). V. Carvalho, *Apologia*, núm.80. Takase Kōichirō tra. *Iezusukai to Nihon* [『イエズス会と日本』], 2, pp.496-498.

⁵⁷ Carta redigida pelo padre Organtino, datada a 29 de Maio de 1570 e dirigida ao Padre Visitador da Companhia de Jesus Álvares (Jap.Sin.6, f.286).

⁵⁸ Carta redigida pelo padre Nicolau da Costa no Japão, datada a 26 de Fevereiro de 1612 e dirigida ao Padre Assistente da Companhia de Jesus (Jap.Sin.15-I, f.118v.).

Logo após o trecho citado na nota 48, segue-se o seguinte: «Ja o padre Diogo de Mesquitad dizem era largo nisto, e estava feito hum grande respondente, feitorizando o fato de seus parentes e irmão carnal, de cuya fazenda, depois de vendida arriscou a prata huma ves em hum navio que via para Malaca, [...]» (Jap.Sin.15-I, f.118v.)

⁵⁹ Carta redigida pelo padre Dias em Macau a 5 de Novembro de 1615 e dirigida ao Padre Assistente da Companhia de Jesus (Jap.Sin.16-II, f.231). O mesmo texto tem a carta redigida pelo padre Dias em Macau a 5 de Dezembro de 1615 e dirigida ao Padre Assistente da Companhia de Jesus (Jap.Sin.16-II, f.249).

⁶⁰ Ordenação redigida pelo Padre Geral da Companhia de Jesus Mutio Vitelleschi, datada a 1 de Dezembro de 1615 e dirigida ao Padre Provincial de Goa (Jap.Sin.3, ff.51, 51v.).

problema. As casas, ou seja, residências dos padres procuradores respectivamente em Macau e em Nagasaki, pareciam acabar por ser locais moralmente contraditórios onde se juntavam a Fé e o dinheiro, acerca do qual o padre jesuíta Fernão Martins escreve: «algunos hombres llaman a esta casa, casa de religiosos, otros la llaman casa de contractacion y delante de nos mismos, [...] los chinos vienen a tratar con el padre y le traen la amostra de lo que queren vender y aqui se les haze el paguamento, y por una cosa o por otra ay siempre concurso destes chinas en casa por la misma portaria della, los quales saben tambien el cubiculo del padre como yo, ado entran y salen a tratar estos negoçoos con poca decencia del lugar por tener el padre procurador su aposiento en el corredor comun y como la casa es pequeña muchas vezes se oye en la Iglesia el rumor que se haze con el dinero al tiempo que se hazen los paguamientos a los chinos, lo qual no se haze sin daño desta casa que vive de limosna, porque no se compadece verennos comprar y vender y entrar caxones de dinero en casa, y por otra parte pedir limosna para nuestra sustentacion»⁶¹.

Poder-se-ia dizer que a situação era mais ou menos igual também no que se concerne à casa do padre procurador em Nagasaki. Tendo em conta a dita situação tão escandalosa, quaisquer actividades evangelizadoras deveriam desfazer-se, segundo creio, mais cedo ou mais tarde. É naturalíssimo o Padre Geral da Companhia de Jesus ter promulgado

⁶¹ Carta redigida pelo padre Martins em Macau, datada a 23 de Janeiro de 1592 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.11-II, f.267v.).

«La segunda cosa de que me parecio avisar a V. P. es acerca del trato de Japon, lo qual pienso yo que se V. P. lo mirara donde yo estoy, que no tuvieron los hombres tanto que dezir de nos, y algunas vezes con razon porque o del todo lo tirara, o busquara otro remedio con que los padres de Japon se sustentaran, que no fuera a nos tan costoso y a los hombres tan odioso, costanos a nos porque por esta causa y mas guanando nombre de mercaderes y perdiendo el de religiosos, porque asi como algunos hombres llaman a esta casa, casa de religiosos, otros la llaman casa de contractacion y delante de nos mismos, porque todo lo que se emplea pera Japon en esta terra y lo que es necessario pera el servicio de casa lo haze el padre procurador, aunque tambien se haze en Canton ado van los portoguezes emplear su dinero, mas alla se haze por hun mercader conocido porque el padre no va alla, mas todo lo que alla no se haze se haze aqui por el dicho padre, y algunas vezes primero se parece mejor por lo qual los chinos vienen a tratar con el padre y le traen la amostra de lo que queren vender y aqui se les haze el paguamento, y por una cosa o por otra ay siempre concurso destes chinas en casa por la misma portaria della, los quales saben tambien el cubiculo del padre como yo, ado entran y salen a tratar estos negoçoos con poca decencia del lugar por tener el padre procurador su aposiento en el corredor comun y como la casa es pequeña muchas vezes se oye en la Iglesia el rumor que se haze con el dinero al tiempo que se hazen los paguamientos a los chinos, lo qual no se haze sin daño desta casa que vive de limosna, porque no se compadece verennos comprar y vender y entrar caxones de dinero en casa, y por otra parte pedir limosna para nuestra sustentacion, por lo qual y por la poca edeficacion que los hombres re/ (f.268) ciben de nos ver tan metidos en este trato, parece que quando V. P. no lo tirase del todo, se hiziese por persona seglar, aunque con esto no aya de crecer el caudal como aguora, mas mas vale que cresca el credito y buena fama de la Compañia que el caudal.» (Jap.Sin.11-II, ff.267v., 268.)

repetidamente nos anos de 1593⁶² e 1612⁶³ as ordenações proibindo tais actividades de índole não edificante. Mesmo que não possamos confirmar o texto original, é certo o Padre Geral da Companhia de Jesus ter promulgado a proibição do idêntico conteúdo no ano de 1609 ou 1610. O Padre Visitador Pasio, tendo-lhe recebido a dita proibição, foi obrigado a interditar a mediação do trato para os japoneses, escrevendo isso adicionalmente nas «Obediencias do Padre Alexandre Valignano Visitador da Provincia de Japão e China, revistas e concertadas pello Padre Francisco Passio Visitador da mesma Provincia para Instrucção dos Reyttores, Anno de 1612» (Biblioteca da Ajuda, 49-IV-56), apesar de o mesmo jesuíta ter sido aquele que se tinha metido tão profundamente nestes negócios⁶⁴. De qualquer maneira, a partir do ano de 1612, foi abandonado o trato de mediação continuado prolongadamente pelos jesuítas⁶⁵. A razão porque o capital investido pelos japoneses até então naquele trato de mediação se tornaria destinado ao empréstimo aos comerciantes portugueses chamado «Naghegane» [投銀] (Nagegane) residiria, segundo presumo, no facto de os jesuítas terem abolido a dita mediação para os japoneses.

O que é digno de notar aqui é, porém, que mesmo que os jesuítas decidissem recusar tal tipo de pedido por parte dos japoneses a partir do ano de 1612, a consignação do xogunato de Tocugaua ainda constituía a única excepção⁶⁶. O xogunato efectuou a compra em considerável quantidade da seda crua embarcada nos navios portugueses mediante o governador, ou seja, o «Bughiō» de Nagasaki [長崎奉行] sob o regime do «Itowappu»⁶⁷. Mas, como já mencionei acima, os jesuítas, apesar das proibições repetidamente promulgadas nos anos de 1604⁶⁸ e

⁶² Ordenação redigida pelo Padre Geral da Companhia de Jesus Acquaviva, datada a 20 de Outubro de 1593 e dirigida ao Padre Vice-Provincial do Japão (Jap.Sin.3, f.27).

⁶³ Ordenação redigida pelo Padre Geral da Companhia de Jesus Acquaviva, datada a 28 de Março de 1612 e dirigida ao Padre Vice-Provincial do Japão (Jap.Sin.3, f.41).

⁶⁴ Takase Kōichirō, “Kirishitan-senkyōshi no keizai-katsudō: Tokuni bōeki no assen ni tsuite” [「キリシタン宣教師の経済活動——とくに貿易の斡旋について」] (in *Shigaku*, 45-2), pp.38-42. Takase Kōichirō, *Kirishitan-jidai no kenkyū* [「キリシタン時代の研究」], segunda parte, c.VII.

⁶⁵ Carta redigida pelo padre Vieira no Japão, datada a 19 de Setembro de 1618 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.17, f.154v.). V. Carvalho, *Apologia*, núm.95. Takase Kōichirō tra., *Iezusukai to Nihon*, 2, pp.513-515.

⁶⁶ V. Carvalho, *Apologia*, núm.95. Takase Kōichirō tra., *Iezusukai to Nihon*, 2, p.514.

⁶⁷ Iwao Seiichi [岩生成一], “Sakoku” [「鎖国」] in *Iwanami-kōza Nihon-rekishi* [「岩波講座日本歴史」], Kinsei [近世] 2, 1967, pp.68-71. Katō Eiichi [加藤栄一], “Seiritsu-ki no Itowappu ni kansuru ichi-kōsatsu” [「成立期の糸割符に関する一考察」] in *Nihon shakai-keizai-shi kenkyū* [「日本社会経済史研究」], Kinsei-hen [近世編], Yoshikawa Kōbunkan [吉川弘文館], 1967.

⁶⁸ Ordenação redigida pelo Padre Geral da Companhia de Jesus Acquaviva, datada a 13 de Dezembro de 1604 e dirigida ao Padre Vice-Provincial do Japão (Jap.Sin.3, f.32v.).

1608⁶⁹, continuaram a participar em várias negociações concretizadas em Nagasaki tais como a decisão dos preços da seda crua, etc, pelo que o xogunato viu-se obrigado, mesmo sob o dito regime, a pedir aos jesuítas, tendo-lhes encomendado a prata, de maneira a comprarem, em lugar dele próprio, aquela mercadoria de produção chinesa tão estimada entre os japoneses.

Uma vez que o xogunato depende da Companhia de Jesus no que se concerne ao trato, a sua política opressiva necessariamente não pode deixar de ser imperfeita, como é evidente pela seguinte descrição vista na carta redigida pelo padre Spinola em Nagasaki, datada a 18 de Março de 1616 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus:

«Non lasciarò di dire che ha buona speranza et quasi certezza che non ha d'havere in Nagasachi nuova persecutione, ne sopra di noi, perche tutti i governatori del Rè desiderano mantenere questa città, col cui commercio s'inrichiscono»⁷⁰.

Tal situação explicada pelo padre Spinola podia ser mantida por pouco apenas enquanto o desejo de conservar o trato português superava a vontade de proibir a missionaçãõ cristã. O xogunato passou a dar gradualmente mais importãncia à segunda vontade do que ao primeiro desejo à medida que Macau foi perdendo o poder económico e militar e foi aumentando, em proporçãõ inversa, a quantidade da seda crua importada ao Japãõ pelos navios chineses e holandeses. Foi justamente devido ao desejo de conservar o trato que o xogunato se abstinha de provocar uma perseguiçãõ real contra o Cristianismo, mas, uma vez desembaraçado o travãõ relativamente ao sobredito equilibrio, o xogunato apresentou de um golpe umas polítics necessãrias de maneira a destruir totalmente a Igreja Cristã (Kirishitan). Pode-se afirmar que ocorreu a viragem fatal nos meados dos anos de 20 do século XVII. O xogunato decidiu tomar uma medida restringente sem precedente contra os navios portugueses no ano de 1626, pretendendo não só apertar financeiramente a Companhia de Jesus mas também provocar uma opressãõ mais severa sobre a Igreja Cristã. Trata-se de uma das medidas gradualmente tomadas naquela altura pelo xogunato de forma a intensificar o controle sobre a cristandade, controle esse que foi ainda mais apertado devido à denúncia bem sucedida por parte dos holandeses e ingleses de os cristãos serem o instrumento servil para a conquista dos

⁶⁹ Ordenaçãõ redigida pelo Padre Geral da Companhia de Jesus Acquaviva, datada a 9 de Dezembro de 1608 e dirigida ao Padre Vice-Provincial do Japãõ (Jap.Sin.3, ff.35v., 36).

⁷⁰ Jap.Sin.36, f.180.

«Non lasciarò di dire che ha buona speranza et quasi certezza che non ha d'havere in Nagasachi nuova persecutione, ne sopra di noi, perche tutti i governatori del Rè desiderano mantenere questa città, col cui commercio s'inrichiscono, et hanno visto che dopo d'essersi disfatte le chiese, si è disertata in parte, perciòche molti christiani dell'altri Regni venivano ad abitarvi per la comodità delle chiese, et dell'uffitii ecclesiastici come ad una Roma del Giapone che cosi la chiamavano, et intendono che non essendovi padri s'ha di disertare del tutto, anzi venendo la nave questo agosto che viene, et andando il Capitano con molti soldati à visitare il Rè, facilmente concederà una chiesa per rispetto delli portughesi, et è bueno pronostico restare ancora in piedi molte chiese, che erano della Compagnia.» (Jap.Sin.36, f.180)

territórios alheios⁷¹.

⁷¹ Takase Kōichirō, “Edo-bakufu no kirishitan-kinkyō-seisaku to kyōkai-zaisei” [「江戸幕府のキリシタン禁教政策と教会財政」] (in *Shigaku*, 47-1, 47-2). Takase Kōichirō, *Kirishitan-jidai no kenkyū*, segunda parte, c.X. Acerca das medidas opressivas novamente tomadas nesta altura contra a Igreja Cristã e os portugueses pelas autoridades xogunatas, vejam-se as seguintes duas fontes ineditas:

[Primeira fonte] Carta redigida pelo padre Matheus de Couros no Japão, datada a 24 de Fevereiro de 1626 e dirigida ao Padre Assistente da Companhia de Jesus Nuno Mascarenhas:

«De Macao, a respeito da mercancia, podem vir Navios direjtos a Nagasaqui; mas forão tantas e tam extraordinarias as sobrançarias, e avexações que este anno fizerão aos Portugueses que parece lhes querem dar ocasião pera que elles mesmos enfadados deixem de vir. Poucos dias ha que os avisarão que lhes avião de ver tudo quando de Japão levassem; de maneira que ha mister buscarmos invenções pera poderem passar as nossas cartas.

Jntimou affincadamente Gonrocu ao Capitão e Feitor da Cidade de Macao que nenhum Navio dali viesse a Japão sem trazer hum rol assinado pellos Vreadores em que dessem fe de quantos nella vinhão escrevendo ate Lascares, e moços de serviço, e que depois de ca chegarem a nenhum avia de deixar desembarcar sem ser primejro registado pello mesmo rol, e que da mesma maneira se avia de executar a tornaviagem. Tambem lhes mandou que não trouxessem a Japão cousa nenhuma, nem ainda tocante a mercancia dos Padres de Macao. Parece que isto atira a nos atalhar toda a sustentação. Agora tivemos nova carta que Gonrocu se muda, e vem outro Presidente em seu lugar; veremos que regimento e ordens tras do Xōgun, ou dos Governadores da Tenca. » (Jap.Sin.37, f.233v.)

[Segunda fonte] «Anua de Japão» redigida pelo padre João Rodrigues Giram em Macau, datada a 31 de Março de 1627 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus:

«Chegados pois que forão os Navios de Portugeses a Nangasaqi antes de lançarem ferro entrou nelles (cousa que nunca Governador algum fez) o Governador Gonrocu inquirio e examinou a todos os que nelles vinhão pera ver se achava alguns, ou couza contra suas leyes de que lançar mão pera cumprir seu danado intento. Depois de por todos a rol por alguns dias os não deixou dezembarcar fasendoos estar a chuva, e ao sol, e pondolhes vigias pera que nenhuma embaração chegasse a bordo, e fez huma nova ley pera mais os avexar, e iuntamente aos cristãos da Cidade, e ainda darlhes perda. A ley foi que nenhum dos moradores de Amacao pudesse pouzar em casas de cristãos, senão de gentios, ou renegados. Bem sentirão os Portugueses tal ley polos inconvenientes, que della se lhes seguirão, e puzerão muyta diligencia pera não se executar: mas não o podendo alcançar lhes foi necessario muito contra sua vontade obedecer a ella por não terem outro remedio. Com isto alcançou o ydolatra parte de seu perverso intento, porque tirando por esta via o modo de vida que tinham alguns cristãos a sombra dos hospedes estrangeiros os fez pera não ficarem sem elle faltar na fee dando rezão que o fasia pera que os sacerdotes em trajos /f.55) de Portugueses não estivessem na Cidade, nem podessem ir a suas casas. E pera que os moradores de Nangasaqi pouco e pouco deixassem a ley de Deos, que he o que com semelhantes traças e modos pretende o Senhor de Japão.

Não contente o dito Governador com isto mandou que não se desembarcasse fato algum ate se ver tudo o que de Amacciao [sic] vinha. Abrirão logo ate os Caixões das peças de çeda pera ver se trazião alguma couza pera os Religiosos que andão em Japão emcubertos.

Repunharão a isto muyto os Portugueses por ser couza nova, e injusta dando suas rezões, e não querendo dezembarcar as fazendas mas finalmente se aquietarão, e acomodarão ao tempo. E por correrem evidente perigo os

Conclusão

A evangelização e o comércio são os factores mais importantes apoiando as relações nipo-portuguesas e nipo-espanholas. Como já mencionei no capítulo primeiro, os dois factores foram promovidos de uma forma conjunta na qualidade de uma empresa, por assim dizer, oficial. Os missionários e os comerciantes foram basicamente de um corpo, não conhecendo, por fim, bom sucesso a tentativa dos poderes unificadores do Japão, ou para melhor dizer, de Toyotomi Fideyoxi e dos xoguns de Tocugaua, de escolher apenas o lucro proveniente do trato e de abandonar o evangelho advogado pelos missionários. Não é correcta, segundo creio, a opinião de o organismo eclesiástico ter sido destruído totalmente devido a uma série de políticas opressivas adoptadas sucessivamente nos anos de 1612 a 1614 pelo xogunato e os padres jesuítas terem sido excluídos do trato português a partir de então. É exactamente quando a vontade de proibirem a missionação excedeu o desejo de manterem o trato que o xogunato decidiu verdadeiramente extinguir a influência eclesiástica existente no Japão e, como já mencionei acima, teve lugar essa viragem, segundo creio, nos meados dos anos de 20 do século XVII, isto é, nos primeiros anos do período «Quanyei» (Kan'ei) [寛永], que durou desde o ano de 1624 até ao ano de 1643. É uma grande vantagem, é certo, os jesuítas terem tido profunda relação e interferência no trato e foi imensa a sua contribuição na evangelização concretizada no Japão. Isso, porém, não podia deixar de criar um ambiente perigoso como no caso de a espada ter dois gumes. Poder-se-ia comentar que os jesuítas dependiam extremamente dos ganhos provenientes do trato e não faziam tanto caso de comportarem-se como mestres puramente espirituais, a qual atitude e tendência não pôde deixar de provocar facilmente a perseguição total sobre a cristandade à medida que a importância do trato português foi relativamente diminuindo na óptica do xogunato.

Quais são os elementos mais decisivos que impeliam o xogunato à proibição total do Cristianismo? Deve-se dizer que aí residia um grande emaranhado de diversos factores. Várias hipóteses têm sido apresentadas relativamente à questão tais como a de não terem sido

que trazião algumas couzas pera Religiosos foi lhes necessario botarem ao mar Livros, Imagens, Veronicas, contas de rezar, e nominas, e ate maços de cartas, com o que se livrarão do perigo da vida os que trazião semelhantes couzas, e da perda pera o fisco do navio, em que se achassem, E o que mais he do risco de acabar de todo este tão antigo comercio e viagem [...]

(f.71v.) Aos Portugueses queixarão ainda mais neste que o anno passado porque lhes tirarão o modo de poderem vender suas fasendas, pois os cristãos, que são os com que melhor se entendem não podião tratar nem fazer seus negoceos. Ao desembarcar o fato o rigor foi excessivo, não ficou caixão de peças, nem escritorio, nem couza que não abrisse pera verem se vinha alguma pera Religiosos, e todas as cartas que acharão levarão ao Governador as quaes mandou abrir, e leer pelas linguas, e lidas as mandava às pessoas pera quem vinhão. O que vendo os Portugueses botarão as mais das cartas ao mar juntamente com as couzas que trazião titulo pera algum Religioso.» (Jap.Sin.63, ff.54v., 55, 71v.)

compatíveis o pensamento cristão e a filosofia moral apoiando o regime do xogunato; a de o xogunato ter concebido uma intenção de aproveitar a questão dos cristãos de maneira a fortificar o seu controle interno; a de a política exterior do xogunato ter de ser interpretada no âmbito das relações internacionais de então nas quais se competiam vários países de maneira a engrandecerem a sua respectiva esfera comercial e o xogunato ter passado a respeitar a cooperação com os holandeses de maneira a realizar o sobredito objectivo, etc. Todos os factores manifestados em respectivas hipóteses teriam, segundo me parece, algo a ver com o motivo da proibição da fé cristã. Todas as hipóteses acima apresentadas, porém, infelizmente não prestam a devida atenção à real maneira de ser da missão católica concretizada nos Descobrimentos nem às reais actividades dos missionários cristãos. Porque tenho tratado no presente ensaio apenas um aspecto «reverso» dos missionários mais nomeadamente jesuítas? É simples a resposta. Porque estou convencido de que não poderemos chegar a uma compreensão adequada relativamente à política adoptada pelos poderes unificadores japoneses quinhentistas e seiscentistas para com a Igreja Cristã, se apenas considerarmos como problema a doutrina propriamente católica e só um aspecto das actividades evangelizadoras levadas a cabo pelos missionários e crentes, actividades essas que convêm aos objectivos próprios da Igreja Católica, sem prestarmos nenhuma atenção ao estado «real e verdadeiro» da Igreja no Século Cristão do Japão.

Tendo-se contentado, segundo me parece, com o «conforto» das actividades eclesiásticas levadas a cabo no âmbito de uma empresa oficial, afigura-se-me sumamente surpreendente como foi violenta a corrupção mental e como foi feroz a luta interna, ambas as quais observadas no interior da Companhia de Jesus no Japão. Inumeráveis exemplos acerca disto podem ser apresentados e aqui me convém citar a seguinte descrição em relação ao padre Carvalho, o qual, apesar de ter ficado numa posição de maneira a administrar a Companhia de Jesus em geral na qualidade do primeiro Superior da Província do Japão, tornou-se no alvo de numerosas críticas ferozes. O padre Geronimo de Angelis comenta sobre o padre Carvalho: «Segundo mal podra elle [o padre Valentim Carvalho provincial desta provincia] reformar os padres que estão em Japão, se elle não proceder com o bom exemplo, mandou que nenhum padre nem irmão tenerse em seu cubiculo cousas de comer; que foi huma ordem santissima, que ha muitos annos, que eu desejei se praticarse; todavia o padre não a guarda; e sera occasião, que tambem os outros a não guardam; tem em seu cubiculo onde esta seite, ou oito layas de dozes de azucar, e no tempo da fruta o seu cubiculo cheo dellas; tem duas ou tres layas de vinho; que he indecente para hum provincial ter como taverna no cubiculo; e comer das ditas cousas a vontade no seu cubiculo onde de ordinario costuma comer; ou pelo menos muitas vezes»⁷². O padre Spinola critica ferozmente o acto de o padre Carvalho ter guardado vários mantimentos no armazém e ter encomendado a sua chave apenas ao seu dojuco particular, dizendo ainda: «et con questo esempio male si ponno riformare i suditi, anzi da

⁷² Carta redigida pelo padre Geronimo de Angelis, datada a 31 de Outubro de 1614 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.34, f.26v.).

questa sollecitudine delli superiori d'accumulare molte cose, et havere la sua dispensa provedata di tutte le delisie, con cappa di presenti, et di convitare li Giaponesi, si è introdotta la superfluità, et alcuna proprietà nelli nostri»⁷³.

Um outro aspecto real e verdadeiro pode ser reconhecido no seguinte episódio. Já no período das perseguições, foi elaborado em idioma japonês um panfleto intitulado *Maruchiriyo no Cocoroye* [『マルチリヨの心得』] (“Advertimentos acerca dos Martírios”), o qual ensina aos crentes encarados com o perigo de morte: «Gaixeraruru mono, chiye funbet aru mono naraba, sono xeibaiuo jitai xezu, cocoro yocu cannin itaxite vquruni voiteua martir nari. Tadaxi sono xeibaiuo iyagarite xisuruni voiteua, martirni arazu» [害せらるる者, 知恵分別ある者ならば, 其成敗を辞退せず, 心能く堪忍致して受くるに於ては丸血留なり。但し其成敗をいやがりて死するに於ては, 丸血留に非ず]⁷⁴. Tradução portuguesa: ‘Aqueles encarados ao perigo de morte, se eles têm a devida sapiência e prudência, hão-de ter o grande prazer em resignar-se ao seu destino e morrer com alegria. Chamam-se mártires tais pessoas. Mesmo que morram, se não se conformam com o mandamento de execução, não se chamam mártires.’ Quanto à mentalidade verdadeiramente concebida pelos missionários, os quais deviam ter aconselhado aos crentes japoneses que se sujeitassem à morte e obtivessem a glória do martírio, afigura-se-nos não tão difícil espreitá-la, como é evidente na seguinte descrição vista numa carta inédita: «Deus Nosso Senhor, cujo este negoceo he, sabe infinitos modos por qualquer dos quais pode acodir a esta cristandade, e o mais facil he tirar a vida ao Tiranno, e com isto se revolverá em guerras todo Japão pretendendo cada hum dos Senhores particulares ser Senhor da Tenca, e huns delles occupados nesta pretensão nos deixarão viver,

⁷³ Carta redigida pelo padre Carlo Spinola em Nagasaki, datada a 18 de Março de 1616 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.36, ff.179v., 180).

«ma el padre provincial che haveva d'essere il primo a dare esempio à i sudditi, senza farmi a sapere cosa veruna, mandò a depositare à diversi luoghi, non solo i suoi libri, scritti, et l'altre cose del vestito, et uso particolare, ma anche molti scrittorii, et cascie piene di corone, Agnus Dei coverti di seta, vasi de vetro, et cose curiose di varie sorti per dare di presente alli christiani, et alli signori gentili in maggiore quantita di quelle che io teneva per provvedere la provincia tutta; ma ancora molti vasi di varie confettione di zucchero, barili di vino Europeo, et dell'India, et altre cose comestibili, che erano della sua dispensa particolare, et l'anno passato havendo di raggione di mandare al padre superiore universale, o a me le chiavi, mando il suo dogico di puoca età con le chiavi di Macao, perche areggiasse li paramenti di messa, et vesti, et gli portasse a Macao al / (f.180) cuni libri, et altre cose necessarie, [...] et con questo esempio male si ponno riformare i suditi, anzi da questa sollecitudine delli superiori d'accumulare molte cose, et havere la sua dispensa provedata di tutte le delisie, con cappa di presenti, et di convitare li Giaponesi, si è introdotta la superfluità, et alcuna proprietà nelli nostri, come dicono li scrittori antichi che avvenne alli Monachi dell'Egitto, et di Palestina, che cominciando a procurare alcuna comodità per accarezzare li peregrine, si fù rilassando la religiosa disciplina,» (Jap.Sin.36, ff.179v.,180)

⁷⁴ Cf. Anesaki Masaharu [姉崎正治], *Kirishitan-shūmon no hakugai to senpuku* [『切支丹宗門の迫害と潜伏』], Yōtokusha [養徳社], 1949, p.166.

outros menos aversos a christandade»⁷⁵. Não se podem analisar nem interpretar de uma forma adequada os actos dos missionários e cristãos, dando apenas uma olhadela ao seu rosto natural sem a maquilagem. Tendo em conta a realidade das suas actividades eclesiásticas efectuadas de forma a participar de uma empresa oficial dos impérios ibéricos e considerando o facto de a Companhia de Jesus, devido à sua própria predisposição, ter-se metido tão profundamente nos negócios mundiais tais como a política e o comércio, e de o seu método missionológico ter-se desfeito e ter falhado, etc., não poderíamos deixar de concluir que foi naturalíssimo a Igreja Cristã ter sido, por fim, repudiada na Terra do Sol Nascente.

⁷⁵ Carta redigida pelo padre Vieira no Japão, datada a 16 de Outubro de 1618 e dirigida ao Padre Geral da Companhia de Jesus (Jap.Sin.17, f.179).

«E o que sobretudo difficulta aver este Rei de mudar parecer e permittir cristandade em seus Reinos, he ser causa principal desta perseguição rezão de estado, temendose de por meyo desta christandade lhe tomarem o Reino, ficandolhe impressa no coração a falsa doutrina dos hereges Olandeses e Ingreses, os quais lhe tem persuadido que por este modo de cristandade primeiro feita em Reinos estranhos tomou el Rei d’Hespanha aos Naturais muitos Reinos, e ajudarão para o mesmo conceito algumas roncarias de Castelhanos inconsiderados que por vezes disserão que seu Rei facilmente conquistaria todo Japão, e esta rezão de estado ainda entre principes cristãos he difficultosissima de superar; Mas Deus Nosso Senhor, cujo este negoceo he, sabe infinitos modos por qualquer dos quais pode acodir a esta cristandade, e o mais facil he tirar a vida ao Tiranno, e com isto se revolverá em guerras todo Japão pretendendo cada hum dos Senhores particulares ser Senhor da Tenca, e huns delles occupados nesta pretensão nos deixarão viver, outros menos aversos a christandade e que só nos perseguem por medo do Senhor da Tenca nos favorecerão, como fizerão muitos delles quando Japão estava dividido em particulares senhores sem aver hum que sobre todos dominasse, como forão estes tres immediatos senhores de tudo id est Taico [太閤, isto é, Toyotomi Fideyoxi(豊臣秀吉)], Daifu [内府, isto é, Tocugaua Iyeyasu(徳川家康)], e este Xogun [Tocugaua Fidetada(徳川秀忠)].» (Jap.Sin.17, f.179)